
遙かなる旅

白波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遙かなる旅

【Zコード】

N1484X

【作者名】

白波

【あらすじ】

フタバタウンに住む少女、マオとアキはナマカマド博士にポケモンをもらつて旅立つ。方向音痴のマオと異常なほど心配性のユキ。二人はそれぞれ目的を持つて旅をするが5年前に起きたある事件を巡り世界を搖るがしかねない事態に巻き込まれて行く…。これはそんな二人の物語である。この物語はサトシがイッシュ地方を旅している頃から始まります。

第一話 旅立ちの朝

ポケットモンスター 締めてポケモン

この世の不思議な不思議な生き物

あるものは山に海に空に大地にと様々なところに生息している

ポケモンの数だけ出会いがありポケモンの数だけ別れがある

この物語はそんな世界に住む二人の少女が出会いと別れを繰り返し成長してゆく旅の記録である

シンオウ地方 フタバタウン

この町に住む少女マオは朝起きると白室の窓を開け太陽の光と心地よい風を受ける。

「今日はついに待ちに待つたポケモンがもらえる日なんだから気合入れて行かなきゃ！」

と言ふとマオは階段を下り

「ママーおはようー！」

とあいさつをしてから食卓に置いてあるパンをトースターに入れる。マオが焼きあがったトーストを食べ始めると横で母のポケモンであるポッチャマがマオが出したポケモンフーズを食べ始める。すると母があくびをしながら起きてくる。いつも通りの日常の風景だが今日からは旅に出てこの家を離れるのでは見れないだろう。

トーストを食べ終わるとマオは「初めてのポケモン」というタイ

トルの本を読みながら一緒に旅立つと約束したユキとの待ち合わせの時間を探っていた。

本を読んでいたマオがふと顔をあげると掛け時計の時計の針は約束の11時を過ぎて12時を指していた。

「しまった！」

と言つとマオは急いでそばに置いてあつたショルダーバックをつかみ

「行つてきまーす！」

と言い家を飛び出した。その後ろ姿を見て母は

「またく…本を読んでいるときは何を言つても聞かないうえにいつもこいつなるのよね…。」

とつぶやいていた。

その頃フタバタウンの入口では…

ユキは約束の時間の30分ほど前に集合場所に来たが約束の時間を1時間過ぎてもマオが現れないためあちへこちへうろついてながらマオを待っていた。

ユキの妄想

マオちゃん遅いよな…どうしたんだろ…まさか…ここに向かう途中で悪い人に捕まつたとか…?…だとしたら電話とかが来てて…いや…もしかしたら悪い人たちに…それとも…私が時間を間違えてマオちゃんがもう行つちゃつたとか?…だとしたら早く追いかけないと…だとしたらマサゴタウンだけど…そこに行く途中で変なポケモンに連れ去らわれて人質にされたりとか…

ふたたびマオ…

マオはフタバタウンの町中を全速力で走っていた。

入口の方へ来て人影が見えてくると

「おーい! ユキちゃん!」

と声をかけた。するとユキは

「マオちゃん！よかつた！無事で！」

と言ひながら駆け寄ってきた。

「どうしたのよ！？ ユキちゃん？」

とマオが言つとユキは

「だつて！マオちゃんがあんまり遅いから悪い人に誘拐とかされてどこかに行つちゃつたんだと思つたんだから！」

と言つた。

「あのわ…ユキちゃん…そんなことあるわけないでしょ…本を読むので夢中で遅れただけよ…。」

とマオが説明するとユキは

「本当にそうなの？なんか大げがしてまともに動けないのに無理してきたとかそういうのじゃないよね？だつたら家で…」

と言いかけたがマオが

「だーかーらー！本を読んでたら時間が過ぎてたのー！」

と言つとユキは

「やうならいいんだけど…無理しないでよ…。」

と一応納得（？）はした。

「とにかく！行こう！マサゴタウンへー！」

と言つてマオが歩き出でやつとすると

「待つて！」

とユキが呼び止めた。

「どうしたの？」

とマオが聞くとユキは

「もしかしたら…フタバタウンを出た瞬間。ポケモンに襲われて持ち物全部持つてかれて拳銃の果てに宇宙人に…」

と言ひだしたがマオは

「大丈夫だから！行くよー！」

とどんどん負のスパイラルが加速するユキの手を引き201番道路をマサゴタウンの方向へ歩き出した。

הנובע...

第一話 旅立ちの朝（後書き）

「んこちーー白波です！」

これからよろしくお願いします。

第一話 シンジ湖からマサゴタウンへ

マサゴタウンのナマカマド博士のところにポケモンをもって行くためフタバタウンから旅立つたマオとコキはなぜかシンジ湖に来ていた。

「あのや…」

とコキが言つとマオは

「なに？ コキちゃん？」

と聞こいた。

「もしかして… マオちゃんつて方向音痴？」

とコキが言つとマオは

「やつそんなわけなつないでしょ… あはは…。」

と言つた。するとコキは

「やつじやないとしたら… もしかしたら… マオちゃんせわざと私をここに連れてきて悪い人たちに合流して…」

言いだしたがマオが

「だーかーらー！ 悪い人とかそういうのはやつじゃないから！ まつたくもつ… コキちゃんつたら… ゆうと旅立つ前にこの湖見ておきたかったのよ…。」

と言いながら湖のほとりに歩いて行つた。

「コキちゃんもおいでよー！」

とマオが言つとコキは

「もしかしたら… 湖に近づいた途端崖が崩れて湖に落ちて…

と言ひだすがマオは

「心配ならそこで座つてなよ…。」

と言つて湖のほとりに座つた。

(おかしいな… マサゴタウンせつちだと思つたのに… 私が方向音痴とかは断じてないはずだから… ゆうと道を間違えただけよ… とりあえず別の道を行けば着くかな…。)

と考えマオがユキの方に歩いていくとユキが

「あれ…。」

と言いながら湖の方を指差した。

「あれって?」

と言いながらマオが振り向くがただ湖が静かに波を立てているだけだった。

「何もないよ…。」

とマオが言うとユキは

「さっきなにかがいた… 透明の…。」

と言った。

「なにか見間違えたんじゃない? とつあえずマサゴタウンに向かお

う…」

と言つとマオはユキと共に湖を後にした。

マサゴタウン

昼間にフタバタウンをでた二人は日もすっかり暮れた夜になつてマサゴタウンに着いた。

「やつと着いたね!」

とマオが言うとユキは

「マオちゃんが寄り道ばかりするからね… もしかしたら… ポケモンをもらえらえる田を一田間違えていたりしてそれをこまかそつとじて… いや… マオちゃんはそんなことしないから、やつぱり…」

と言つてだすがマオは

「とにかく! ナマカマード博士のポケモン研究所に行こう!」

と言つたがユキが

「もしかしたら… こんな時間に行つたりして怒られて拳銃の果てにポケモンももらえず… 警察に追われる身になつたりとか…」

と言つてだす

「警察には追われないと思つたけど… 確かにこんな時間に行つたら迷惑ね… ポケモンセンターに行きましょう…。」

と直つてポケモンセンターがあるであつた方向へ歩き出しだ。

一時間後…

結局マサ、ゴタウン中を歩き回つた結果よつやくポケモンセンターに着いた。

「マオちゃん…やつぱり方向音痴なんじや…。」

とユキが直つがマオは

「だーかーらー！そんなわけないでしょー！今日はまやつれと寝て！明日研究所に行くわよ！」

と言つと一人はジョーイさんに行つて一人部屋に泊まることにした。ポケモンセンターは便利な施設でポケモンの回復を無料でやってくれるだけでなく旅をするトレーナーの宿としての機能も果たしている。また、地方によつてはポケモンセンターの中にショップが併設されておりキズぐすりやモンスターボールといつた旅をするつえで必要な道具がそろえられる。

次の日…

「じつちかな…やつぱりじつちへ。」

とつぶやきながら地図を見ながら歩くマオの後をユキが歩いている。

「やつぱり迷つてるんじやないの？」

とユキが聞くとマオは

「違つて！じつちで会つてるまー。」

と言つながら角を曲がると白髪に白いひげを蓄えたこわもての男性とぶつかった。

「すいません…。」

とマオが謝るとその男性は

「君たちは…ちゅつときつちに来なさい…。」

と言つながら歩き出した。

つづ…

第一話 シンジ選からマサタウンへ（後書き）

「とにかく白波です！」

読んでいただきありがとうございました。

次回もよろしくお願ひします。

第三話 初めてのポケモン

マサゴタウンで迷子に「違うー」「マオちゃん誰に話しかけてるの?もしかしたら…」「作者よー作者!」…マサゴタウンを歩いていたマオとユキは途中で出会った男性の後ろを歩いていた。

「誰なんだろう…あの人…。」

とマオが言うとユキは

「もしかしたら…あの人とつても悪い人で私たちを…」

と言いだしたが

「だから! そんなこと言わない!」

と言つてそれを止める。

しばらくその男性について歩いていくと大きな建物についた。

「ヒジが、私のポケモン研究所だ。」

と言つとマオが

「私の…つてあなたナマカマド博士だったんですか!」

と言つた。するとナマカマド博士は

「なんだ…君たち私が誰かわからないのにつってきたのかね? と少ししあきれたような顔をして言つた。

研究所の中の案内された部屋に入るとそこにはモンスターボールが三つおいてあつた。

「ヒのモンスターボールにはシンオウ地方の初心者用ポケモンであるペンギンポケモンのポッチャマ、わかばポケモンのナエトル、ござるポケモンのヒザルの三匹が入つていてる。」

と言いながらナマカマド博士はモンスターボールから三体のポケモンを出した。するとマオは

「私はヒザルがいい!」

と語りてヒロザルを抱いた。抱かれているヒロザルはとてもうれしくしている。するとユキは

「わっ私は…ナートル…。」

と言つとユキはナートルを抱き上げた。ナートルはもともとそだからだらうか？落ち着くのか、はたまた少しばかりおびえているのか、ともおとなしくしている。その瞬間胸を張つて選ばれると思っていたのかポッチャマはかなりショックだったらしくその場で固まつてしまつた。

「あつポッチャマが…もしかしたら…」のままこの子が…

とユキが言つだすがマオは

「まつたく…ユキはいちいち心配しそうなの…」

と言つてから

「博士！…ありがとうござります！」

と言つた。

「ところでおたちはこれからどうするのかね？」

とナマカマド博士が言つとマオは

「私は各地でジム戦をしたいと思ひます！」

と答えた。そのあとにユキが

「私は…コンテストに…。」

と答えた。するとナマカマド博士は

「うむ！よろしご！それではこの町を出て北にあるクトブキシティへ向かうとい！そこでもうすぐポケモンコンテストが開催されるぞ！それにクロガネジムがあるクロガネシティも近いからな！それと後これはポケモン図鑑だ！ポケモンたちを大切にな！」

と言いながらピンク色のポケモン図鑑を出した。

ポケモン図鑑にはあらゆるポケモンのデータが入つておりそのポケモンがどんなポケモンであるかだけでなく自分のポケモンの憶えているわざや能力なども見ることができる。

ポケモン図鑑を受け取るとマオは

「はい！」

と答えて研究所を出てコトブキシティへ向かった。
「ユキちゃん…ついに私たちもポケモンがもらえたね…よーし…張り切って行こう…」

とマオが言うとユキは

「もしかしたら…旅の途中で大けがして一度とおうちに帰れないかも…それならまだしも…もつととんでもないことに巻き込まれて…」
と言いだしたがマオが

「ユキちゃん…考えすぎだって…ほんと、昔から変わらないよね…旅をしたら少しばわれるんじゃないの？」

と言った。それに対しユキは

「旅で自分を変える…もしかしたら変わりすぎてみんな私が誰だかわからなくなるかも…でもそれだけならまだしも…」

とふたたび言いだしたがマオは

「まあいいか…。」

とつぶやいて一人で仲良く歩いて行つた。

ポケモンももらつたが二人の旅はまだ始まつたばかりだ！

つづく…

「おーい！そつちはフタバタウンの方向だよー！」

と助手に呼び止められマオは

「あつ！北つてこっちだつた！」

と言つて今度こそコトブキシティの方へ歩き出したのであった。

つづく…

第三話 初めてのポケモン（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

第三話にしてようやく主人公がポケモンを持ちました。

これからもよろしくお願いします。

第四話 ライバル登場！マオ対ユウキ

ポケモンをもらい旅に出たマオとユキはポケモンコンテストに出場するため「トブキシティへ向かう途中近道をするため森の中を歩いていた。

「マオちゃん… じつちで大丈夫なの？ もしかしたら… このまま一生この森から出られないんじゃ… やっぱり地図に書いてある道を通り方が… でもそっちを通りても突然悪い人に襲われて…」とユキが言いだすとマオは

「大丈夫だよ！ じつちから行けば絶対に近いから…」
と言しながらせらりと森の中を進んでいった。

しばらく歩くと回りに森の中を歩く少年とであつた。その少年はマオ達を見るなり

「お前たちポケモントレーナーか？」

と聞いた。マオが

「ええ…。」

と答えるとその少年は

「だったらバトルしようぜ！ 俺はミオシティ出身のユウキだ！ お前は？」
と言つた。

「私はフタバタウン出身のマオです… 私、旅に出たばかりでポケモン一匹しか持っていないんだけど…。」

とマオが言うとユウキは

「別にいいぜ！ それじゃあ一対一でどうだ？」
と聞いた。マオが

「もちろんです！ ユキ… 審判頼める？」
と言つとユキは

「ええ……でも……もしかしたら……審判やつたはいいけどわざが飛んできて大けがして……そんでもつて……」

と言いだすがマオは

「わざあつたたりとかそつそつないからー…やめないうちやつてー…」

と言つとユキは二人の間に立ち

「これから、フタバタウン出身のマオ対ミオシティ出身のユキのバトルを始めます……使用ポケモンは一体どちらかのポケモンが戦闘不能になつた時点で試合終了いたします……それではバトル終わり！じやなくて…始め！」

とユキが言つとマオは

「頼んだわよー！ヒコザル！」

と言いながらヒコザルを出した。それの対し相手は

「行くぞ！ムツクル！」

と言つてムツクルを出した。

「あのポケモンはムツクルね……。」

と言いながら図鑑をかざすと

『ムツクル むくじりポケモン ムクバードの進化前 群れを作る』ことの一匹の弱さをカバーしている。タイプはノーマル・ひこう』

という解説が出た。

「ヒコザル！先手必勝よー！ひっかく攻撃ー！」

ヒコザルがムツクルに迫るとユキは

「ムツクル空に飛んでよけてからつばさでひつー！」

と指示をだした。

ムツクルは空へはばたきヒコザルの攻撃をかわすとひばさでひつ

を放つた。攻撃はヒコザルに命中し後に飛ばされた。

「ヒコザル！がんばつてー！」

とマオが声をかけるとヒコザルはゅっくりながらも立ち上がる。

「反撃よー！ひっかく攻撃ー！」

「ムツクルもう一度つばさでうつだー！」

「ヒコザル！かわしてもう一度ひっかくー！」

ムックルはヒコザルに向かってつばさでうつを放つたがヒコザルはそれをかわし低空飛行していたムックルに攻撃を命中させた。

「ヒコザル！そのままムックルにつかまつて！」

とマオが言つとヒコザルはムックルの背中につかまつた。

「ムックル！ヒコザルを振り落せ！」

といつユウキの声を聞きムックルは右へ左へ旋回するがヒコザルは離れない。

「ヒコザル！ひっかく攻撃！」

とマオが言つとヒコザルはひっかくを放とうとしたがバランスを崩してムックルから落ちてしまった。

「いまだ！ムックル！とどめのつばさでうつ！」

とユウキが言つとムックルはヒコザルにつばさでうつを放ちつばさでうつを直撃されたヒコザルは倒れてしまった。

「ヒコザル…先頭不能…よつて勝者ミオシティ出身のユウキ…」

とユキが言つとユウキは

「よくやつたぞ！ムックル…。」

と言つてからマオの方を向き

「いいバトルだつたな…まだどこかであつたらバトルしようぜ！…もちろん！それまでにお互いもつと強くなつてから…」

と言つた。マオは

「もちろんよ！」

と答えるとユウキと握手をした。

「これで俺たちはライバルだな！まだどこかで会おうな！」

と言つとユウキはさつきマオ達が歩いてきた方向に歩いて行つた。

「さてと…私たちも行こうか…。」

とマオが言つとユキは

「そうね…でも、もしかしたら…向こうに行つたらい迷宮に迷子になつて…。」

と言ひだすが

「迷子じゃないから大丈夫だよ…。」

「

とマオが言つと

「それならいいんだけど…。」

と言いながらマオとともに歩き出した。

始めてポケモンバトルをしたマオ。結果は負けだがライバルのユウキとまた会うことを約束し一人の旅はまだまだつづく…

第四話 ライバル登場！マオ対ユウキ（後書き）

「ここにちはー白波です！」

バトルのシーンいかがだったでしょうか？バトルの描画等は苦手なので読みにくかったかもしません…。

これからもよろしくお願いします。

第五話 ロケット団現る（前編）

コキがポケモンコンテストに出場するためコトブキシティへ向かっているマオとコキは森の中の小さな広間で食事をとつていた。

「マオはコキが作ったサンデイッチを食べると

「おいしげ！ やっぱりコキが作った料理は最高ね！」

と言つた。するとコキは

「それならいいけど… もしかしたら… 賞味期限が切れで…」

と言つたが

「食べる気がなくなるでしょうが！」

とマオが言つとコキは黙つてしまつた。

「とにかく… コキって昔から変なことばかり考えるナビ… もう少しきつと明るく考えられないの？ そつ… ポジティブに！」

とマオが言つた。

「ポジティブに… ポジティブに… 私の作った料理はおいしつつてもらえて…」

「ううう… そんな感じ…」

「そんでもつて… それで… 変なものとか間違つて入れてマオちゃんが…」

とコキが言つとマオは

「ストップ！ また変な風に考えてるし…。」

と言つた。

「じめん… やっぱりあれ以来…。」

とコキが言つとマオは

「まあわからないこともないけど…。」

と言つた。すると森の中から突然ポケモンが飛び出しついた。

「あのポケモンは…」

と言つながらマオが図鑑をかざすと

『「リンク センチュラポケモン ルクシオの進化前 体を動かすた
びに筋肉が伸び縮みして電気が生まれる。ピンチになると体が輝く。
タイプはでんき』

とこう説明が出た。するとその少しあとから

「その子止めてください！」

と言いながら一人の少女が駆けてきた。

「リンクの近くにいたユキがリンクを抱き上げるとリンクは
嫌がって右へ左へ抵抗する。少女はユキからリンクを受け取ると
「ありがとうございます」ざいます。私アキといいます。」

と言った。

「私はマオです！」

「私は…ユキ…。」

と二人がそれぞれ答えるとアキは

「マオさんにユキさんね…一人ともよろしく…。」

と言った。

「ところでどうしてリンクが逃げてきたんですか？」

とマオが聞くとアキは

「はい…それが…「リンクと一緒にコトブキシティの「コンテストに
出ようと思つて道を歩いていたら…突然変な三人組に襲われて…」
リンクが先に逃げて行つたんですね…。」

と答えた。

「その三人組つて？もしかしたらとんでもない組織の下つ端とか？」

とユキが聞くとアキは

「さあ…あの人たちが誰だかさっぱり…。」

と言つた。するとわつかのようなものが飛んできてリンクを縛つ
てしまつた。

「「リンク！ いつたい誰がこんな」と…」

とマオが言つと

「いつたい誰がこんなこと…と言われても答えないのが常識だが…
まあ今回ぐらいは答えてやるわ…。」

と言つと男女三人が姿を現して

「光よ！」

「水よ！」

「ポケモンよ！」

「天をも震わせる!!ヨージック」

「海に帰りし美しきビーナス」

「神か閻魔かその名を呼べば」

「誰もが立ち止まる重い響き」

「エリ！」

「マリ！」

「ダイキ！」

「今回も主役は私達！」

「我ら天下無双の」

「「「ロケット団」」

と名乗るとその横からスカンプーとピッピが出てきた。

「ロケット団？何それ？」

とマオが言つとユキが

「聞いたことがあるわ…カントーを中心に暗躍する人のポケモンを奪う悪い人たち…。」

と言つた。

「珍しいわね…。」

とマオが言うとユキは

「もしかしたら…目を付けられて、拳銃の果てには…」

と言つた。

「やつぱりこうなるのか…。」

とマオがつぶやくとエリが

「私たちの事…忘れてるでしょ…。」

と言つた。するとマオは

「あつ！そだつた！あなた達！コリンクを返して…」

と言つた。それに対しダイキは

「返せりて言われて返す奴はどーにもいねーよー。そんじやあポチつ
とな。」

と言つてボタンを押すと森の中から氣球が出てきた。

「ほらー！待ちなさいー！」

ヒマホが言つが三人と一緒にコリンクを連れて氣球に乗つてしまつ
た。

「それじゃあー帰るー！」

と言つと三人は氣球で空へ飛んで行つてしまつた。

「コリンクがロケット団と名乗る謎の集団に奪われてしまつた。マ
オはユキはそしてアキはコリンクを取り戻すことができるんのであ
るつか？」

つづく…

第五話 ロケット団現る（前編）（後編）

読んでいただきありがとうございます。

ロケット団が名乗るときのセリフはロアの時のものを参考にしています。（個人的にロアの時のが好きなので）

これからもよろしくお願いします。

第六話 口ケット団現る（中編）

「トブキシティで開催されるポケモンコンテストの出場するため旅をしていたマオとユキは口ケット団を名乗る組織に遭遇した。

「あこつらじにこじたのよー。」

とマオが言うとユキは

「もしかしたら…もう遠くの方に行つて…口ケットは…。」

と言つがマオは

「そんなこと言わない！」

と言つてロケット団の気球を探す。

「口リンク！ どこへ？」

とアキが呼びかけるが口リンクの声は聞こえない。

「三人で分かれて探しましょうー。」

とマオが言うとユキとアキはうなずいて三人はそれぞれ別の方向へ行つた。

ユキが森の中を歩いているとムックルの群れがいた。

「ムックル… そうだ！」

と言つとユキは

「ナエトル！ 行つて！」

と言つながらナエトルを出した。

「ナエトル！ ムックルのたいあたり！」

ナエトルは迫りいきなりの奇襲に驚いたムックルの群れは混乱している。たいあたりはその内の一体に命中した。

「華麗に決めるわよ！ モンスターボール！」

ユキが投げたモンスターボールはムックルにあたり揺れ始めた。

「一回…一回…三回…」

とユキがつぶやいていると

カチッ！

という音とともにモンスター・ボールが止まった。

「やった！ ムックルゲットで心配なし！」

とコキが言つとナエトルが横でとても喜んでいた。

「出てきてムックル！ 気球を探して！」

と言いながらモンスター・ボールから出すとムックルは気球を探して飛んで行つた。

「でも… もしかしたら… このままムックルが返つてこなくて、逃げられちゃうかも… それならまだいいけどあいつらにつかまって…」

と言つだしたコキを横でナエトルは半ばあきれた様子で見ていた。

ちようどそのころマオが歩いていると先ほどの気球が見えてきた。

「あつ！ あれは…」

と言つとマオは気球を追いかけだした。

「早い！」

気球

「あつ！ あの子さつきの…」

とダイキが言つとエリが

「ここまで追いかけてくるなんてね… ダイキ何とかしなさい…」

と言つた。

「わーたよ… ポチッとな…」

と言つてボタンを押すと気球の高度は上昇した。

「こーらーー！ ここからじやヒゴザルの攻撃は届かないし…。」

と言つていると空を飛んでいた一匹のムックルが気球を見て元来た方向へ戻つて行つた。

「なんなの？ あれ…。」

アキはというと森の中を走り回つていた。

「あいつらがこに行つたのよ…。」

とつぶやくと群れで行動する」とが多いムックルが一匹で飛んでいた。

「ムックル？ 確か群れで行動するはずなのに……誰かのポケモンなのかな？」

と気になつたことをつぶやいたがとにかく気球を探すことに専念することにした。

ふたたびマオ

「ハア……ハア……どうすりやいいのよ……。」

と森の中で息を切らして立ち止まつていると先ほどのムックルだろうか？ ロケット団の気球に攻撃を始めた。攻撃を受けた気球は徐々に高度を下げていく。

「なんかよくわからないけど……チャンス！」

と壱つとマオは気球が落ちて行つた方へ走り出した。

「せつからくゴジロウさん達にもひつた気球が……。」

とダイキがつぶやくと

「また修理して使えばいいわよ……。」

とマリコが答えた。

「あなた達！ ロコンクを返しなさい！」

とマオが大声で壱つがダイキは

「でも、これ修理費結構かかるんじゃ？」

と言つた。それに対しマリコは

「つべこべ言わない！ あなたならなんとかできるでしょ！」

と答える。

「ちょっと人の話聞きなさいよ！」

とマオが壱つとマリコが

「なに？ いたの？」

と言つた。

「いたわよ！」ロコンクを返しなさい！」

とマオが言つとHリが

「こうなつたら力ずくでも逃げるわよー行けースカンプー！」

と言いながらスカンプーを出した。

『スカンプー スカンクポケモン スカタンクの進化前 お尻から強烈に臭いにおいの液体を飛ばして身を守る。匂いは24時間消えない。タイプはどく・あく』

「お前もだ！」

「あなたもよー！」

と言つとダイキとマリコはそれぞれフワンテとピッピを出した。

『フワンテ ふうせんポケモン フワライドの進化前 人やポケモンの魂が固まつて生まれたポケモン。じめじめした季節が大好き。タイプはゴースト・ひこう』

『ピッピ ゆうせいポケモン ピイの進化系 愛くるしいしぐわで大人気。静かな山奥で仲間たちと暮らしていると考えられている。タイプはノーマル』

「三体もいっぺんに…どうこうつもり？」

とマオが言つとHリは

「何つて？決まつてるじゃない…三体でいっぺんに攻撃するのよ！」

ロケシト団と三対一で戦うことになつたマオ。はたしてアキのリンクは取り戻せるのか？

つづく…

第六話 ロケット出現の（中編）（後編）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第七話 口ケット団現る（後編）

「トブキシティで開催されるポケモンコンテストに出場するためトブキシティへ向かっていたマオとユキは途中口ケット団と遭遇しアキのコリンクが奪われてしまった。はたしてコリンクを取り戻せるのだろうか？

「何のつもりって…三体でいつぺんに攻撃するに決まってるでしょ！スカンパー！みだれひつかき！」
とエリが言つと続いてダイキが
「フワント！かぜおこしだ！」
と言つた。そのあとマリコが
「それじゃあ私も…ピッピーおつぶくビンタです！」
と指示を出す。

「ヒコザル！かわして！」

とこゝ声を聞きヒコザルは技をかわすが次々と飛んでくる攻撃をかわしきれなかつた。

「ヒコザル！」

とマオが言つとHリは

「威勢がいいに決…よわっちいわね…。」

と言つた。

「まだまだよー…ヒコザル…ピッピにひつかく！」
とマオが言つとヒコザルはピッピに迫るが

「ピッピ…おうふくビンタです…」

とこゝ指示を聞いたピッピのおつぶくビンタで跳ね飛ばされてしまふ。

「ヒコザル！頑張つて！」

とマオが言つとHリは

「つるさコトレーナーね…スカンパー…トレーナーにぶくガス！」

と言つた。

「えつ！」

とマオが言つているとスカンパーはマオの方へ攻撃を出した。
マオは息を止めて必死にガスを吸わなによつにしているが
(やばい…これを吸つたら…でも…もひダメ…。)

と思つた瞬間。

「ムツクル！あのガスを吹き飛ばして…」

とこゝ声の後に森の中からムツクルが飛んできてガスを吹き飛ばした。

マオが力が抜けたのか氣を失つて倒れてしまつた。

「マオちゃん！」

と言ひながらユキが飛び出してきた。さひにそれに續べよひにアキ
が出てきて

「あなた達一三体一の上にトレーナーを攻撃するなんて何を考え
るのよ！」

と言つた。するとHリは
「じゅまだつたからやつただけよ…まつ！威勢がいいだけで弱かっ
たけど…。」

と答えたが後ろの方でダイキとマリコが

「三対一までならまだしもトレーナーを攻撃するのはやりますがだよ
な…。」

「やうですわ…ですがにそこまでは…。」

とこゝような会話をしていた。それを聞いたHリは
「私たち悪役でしようがーそれぐらいやりなさいよー…

と一人に言つた。

「「とは言つてもねー」

と一人が声をそろえて言つた。

「もういいわよー」リンクはこゝにだけひたはづのリンクが
と言つた。振り返ると檻が開いておつそりこつたはづのリンクが

いなくなっていた。

「コリンクなら、さつきあなた達がコチャゴチャ話している隙に取り返させてもらつたわよ…。」

とアキの声がした。アキの方を向くと確かにアキの横にコリンクがいた。

「ユキちゃん！反撃するわよ！コリンク！スパーク！」

「私も…ムックル…つばさでうつ…ナエトルはたいあたり…。」

と一人がそれぞれ指示を出すとムックルとコリンク、ナエトルはそれぞれロケット団のポケモンを攻撃し始めた。

三体が出した攻撃はそれぞれ命中した。

「コリンク！とどめのスパーク！」

コリンクがスパークを放つと小さな爆発が起つ

「…やな感じーーー」

と言ひながら三人は飛んで行きキラーンとお星さまになってしまった。

「よく飛ぶわね…。」

とアキが言うとユキは

「もしかしたら…あの人たちが変なところに飛んで私たちの恨みを持つて襲つてきたりとか…」

と言つがアキは

「大丈夫じゃないの？つてマオちゃんは！」

と言ひながらマオの方を向くがマオはまだ意識が回復してなかつた。

「大変！急いで治療しないと…」

「…ちゃん…マオちゃん！」

という声でマオがゆっくりと目を開けると

「マオちゃん！よかつた！心配したんだからーー」のまま目を覚まさないかと思ったー」

と泣きながらユキが抱きついた。

「ここは？」

とマオが聞くとアキが

「病院よ…マサゴタウンの…お医者様呼んでくるわね…」。

と言い残し病室を出て行った。

「マサゴタウン…また戻ってきてちゃったんだ…。」

とマオが言つとユキは

「戻つたもなにも…私たち虢虢とマサゴタウンのあたりがつづつ
てただけみたいよ…。」

と言つた。するとマオは

「なんだ…そうだったの…。」

と言つと思いつ出したよう

「やつだ！コリンクは？」

と言つた。

「コリンクは無事だつたよ…ちやんと取り返したから…。」

とユキは答えた。

「やう…よかつた…。」

とつぶやくとマオは寝てしまつた。

一方その頃アキの攻撃で飛ばされたロケット団は木に引っかかつ
ていた。

「あいつらー絶対復讐するんだからー。」

とヒリが言つとダイキは

「また始まつたよ…昔からヒリは根に持つからな…。」

とつぶやいた。

無事コリンクを取り戻したマオ、ユキをしてアキ。マオとユキの
旅はまだまだづく…

第七話 ロケット出現る（後編）（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからもよろしくお願いします。

第八話 マサノタウンの病院で…

「コキがポケモンコンテストに出場するためコトブキシティへ向かっていたマオとコキは途中ロケット団に襲われ病院にいた。

「少しとまこえスカンパーのビバガスを吸ってますからね…念のため一週間はここで入院することをお勧めいたします…。」

と医者が言つとマオは

「旅は続けられますか?」

と聞いた。

「それはできると思うけど…とりあえずフタバタウンの君の母親に連絡したから…またあとでいいから君もジュンサーさんに事情を話してくれるかな?」

と医者が言つとマオは

「はー…。」

と答えた。

マオは病室に戻るとお見舞いに来たコキに

「ここで一週間入院だつてや…。」

と言つとコキは

「やつ…もしかしたら…一週間つてのは…」

と言つた。マオが

「コキちゃん…縁起でもないことに言わないでよ…でも…コンテストに会わないね…。」

と言つとコキは

「「めん…縁起でもないことに言つて…それに別にいいのよ…コンテストの事は…また別のところでも開催されるし…それにたぶん出したとしてもちゃんと出来ないよ…マオちゃんが大変なのに…。」

と答えた。するとマオは

「先に行つて…。」

と小さな声で言つた。

「えつ？」

とユキが聞き返すとマオは

「先にコトブキシティへ行つてつて言つてゐるー・マオちゃんコトブキ
ストに間に合はないじやないー後で追いつくから…。」

と言つた。

「マオちゃん…でも私は…わざわざ言つたけど…」

とユキが言つのをマオはさえぎるよう

「私のことなんか気にしなくてこーから…行つて…」

と言つた。

「マオちゃん…。」

とユキがつぶやくと病室の入り口から

「確かにここに一週間いたらコントローラーには間に合はないわ…。」

という声がした。ユキが振り向くとそこにはアキが立っていた。
「でもね…マオちゃん…ユキちゃんや私はあなたの事が心配なのよ
…特にユキちゃんは…幼なじみがこんなことになつたら誰だつて心
配するわよ…私も「リンクを必死に取り返そうとしてくれた人をほ
おつておいてのんきにコントローラーなんか出てられないわ…。」
とアキが言つとユキは

「アキちゃんの言つ通りよ!私たちはマオちゃんが何と云あつと過
院するまでお見舞いに来るからね!」

と言つとマオは

「少し一人にさせて…。」

と言つた。するとユキは

「わかった…。」

と答えてアキと共に病室を出た。

一人になるとマオは

「私つたら何を言つてるんだらつ…。」

とつぶやいた。気が付くと目から流れてきた涙がシーツに一滴、一滴と落ちていった。

「ユキとアキは病室から出ると休憩室へ行つた。

「マオちゃん…怒っちゃつたのかな…もしかしたら…もつ口きいてくれないかも…それならまだしも私の顔も見たくないかもしれない…。」

とユキが言つとアキは

「そんなことないわよ…マオちゃんたぶん私たちに氣を使つてるんじゃないかな…グランドフェスティバルまでに開催されるコンテストの回数も限られてるし…。」

と答えた。

「そうだといいけど…。」

とユキが自信なさげに答えるとアキは

「あなた達幼なじみなんでしょう…大丈夫だつて…」

と言つた。

そんな様子を上空の気球から望遠鏡で見ているロケット団の三人組の姿があつた。

「見つけた！ぜつたい復讐してやるんだから…」

とエリが言つとマリコが

「ちょっと…復讐とかそういうのよりもやるべきことがあるんじやありません?」

と聞いた。

「私のやることに口を挟まないで！私をコケにしてくれた礼は絶対するんだから…」

とエリが言つとダイキが

「こりや止められんな…。」

とつぶやいた。

「ダイキ！なんかメ力作りなさい！」

とエリが言つとダイキは

「メカつて？」

と聞いた。

「復讐するためのでしょーーーあんたに任せせるからーーー」

とエリが言つとマコ「が

「ただでさえ予算がないのでそんなことに使つのはどうかと…。」

と静かに抗議するがエリは聞く耳を持たない。

「とにかく！さつさと作るのよーーいい？私のスカンパーのぐくガスを吸つたはずだから一週間ぐらいはあいつらこの町にいるはずね…だから一週間以内に作つてーーー」

とエリが言つとダイキはめんどくわいに

「わかつたけどさーーー一週間じゃなかなか予算の都合上厳しいんだけど…。」

と答えた。それに対し

「そこはあんたが何とかしなさいーーー」

とエリが言つとダイキは

「やつぱつ…。」

とつぶやいた。

マサゴタウンで入院する」となつてしまつたマオ…一人の旅は

まだまだ続く…

第八話 マサコタウンの病院で…（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからもよろしくお願いします。

第九話 マサゴタウン それぞれの…

「トブキシティで開催されるポケモンコンテストに出場するため旅をしていたマオとユキはマサゴタウンでマオが入院したたマサゴタウンにいた。

マオは病室の窓から見える景色を眺めながら横にいたヒコザルに
「ねえ…ヒコザル…。」

と話しかけた。ヒコザルがマオの方を向くと
「旅つて思ったよりも大変だよね…ごめんね…いきなりこんなこと
になっちゃつて…。」

と言いながら頭をなでるとヒコザルはうれしそうな顔をしている。
「あなたはそういうこと気にしないのかしら…。」

とつぶやくとマオはヒコザルの頭をなでるのをやめて再び外を見た。
「早く旅の続きをしたいな…。」

とマオはつぶやいた。

ユキとアキが花屋でお見舞いのための花を見ているとアキが
「ねえ…ユキちゃん…あの人って…。」

と言ひながら一人の少女を指差した。ユキがそっちの方を見ると頭
に緑色のバンダナをした少女が花を選んでいた。

「あれってさ…ハルカじゃない?」

とアキが言つとユキは

「そうかもしれないけど…もしかしたら間違つて…それで…」

と言つがアキは

「間違つてたら謝りやいいじゃん!」

と言つてその少女の方へ行つた。

「あの…もしかして…ハルカさんですか?」

とアキが聞くとバンダナを付けた少女が

「やうだけど…。」

と答えた。するとアキは

「やつたユキちゃん！本物よ！本物！本物のホウエンの舞姫ハルカさんよ！」

とやや興奮氣味に言つた。

「ほんとにほんとに本物！すうじー！みんなとじりで会えるなんて…。」

とユキが言つとハルカは

「そんなに言われると照れるかも…。」

と言つた。

「あつあのサインいただけますか…私たちポケモンコードイネーターなんです！」

とアキが言つとユキは

「私はまだ旅立つたばかりでコンテストパス持つてないけど…。」

と言つた。するとハルカは

「そりやあ頑張つてほしいかも！」

と言つとどこからか色紙とペンを出してサインを書いた。

「はい！これ！」

と言いながら色紙を渡すとハルカは

「あなた達はもうすぐ開かれるコトブキ大会に出るの？」

と聞いた。するとアキが

「それは…ちょっといろいろあつまじて…出るなら次の大会からかなつて…。」

と言つた。

「そりやあ私はこれからシンオウ地方のコンテストに出るつもりだからまたどこかで会えるかも！それじやあまたどこかで…。」

と言つとハルカは去つて行つた。

「すごいね！ハルカさんと話せちゃつたよ！サインまでもうつちやつたし！」

とアキが言つとユキは

「本当ね…。」

と答えた。それから思い出したよう

「そうだ！マオちゃんへのお見舞いの花！」

と言ひとアキは

「あー忘れてた！」

と言ひと二人はふたたび花を選び出した。

一方こちらはロケット団の三人組

ダイキはスパナを握ると

「本当にいいのか…作つて…これでシンオウ地方でコリンクを大量捕獲するために降りた予算がなくなつちうけど…。」

とエリに言つた。

「いいから作りなさい！サンバ博士からの頼みよりも復讐が優先よ！」

とエリが言ひとエリの携帯の着信音が鳴りエリが

「はい…もしもし…。」

と電話に出ると電話の相手は

『ナンバである！』

と言つて電話を切つた。

「そりそりナンバ…とにかく作りなさい！」

とエリが言ひとマリコが

「でも…今回上手くいけばヤマダとコサブロウの地位を私たちのものにできるんですよ…。」

と言つた。するとダイキは

「確かにマリコの言ひとおりだ！リンバ博士は早急にコリンクを必要としているがヤマトとコサンジが別の任務で不在だから俺たちに頼んだんだ…下手に失敗するとこれつりつてのもあるかも…。」

と言つた。その直後今度はダイキの携帯が鳴つたためダイキが

「はいもしもし…ダイキです。」

と出ると案の定電話の相手は

『ナンバである！』

と言つて電話を切つた。

「とにかく！つべこべ言わざ作るー。」

とエリが言つとダイキはメカを作り出した。

「今に見てなさい…目に物見せてやるわ…。」

とその様子を見ながらエリはつぶやいた。その横でマリコは

「これでナンバ博士から信頼を得ようとそういう話は消えたわね

…。」

とため息をしながらつぶやいていた。

つづく…

第九話 マサゴタウン それぞれの…（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからもよろしくお願いします。

第十話 ホウホン地方のトレーナー

「トーブキシティで開催されるポケモンコンテストに出場するため旅をしていたマオとユキはマイパタウンにいた。

今マオは少しだけ外出の許可が出たため母と共に病院近くのベンチに座っていたにいた。

「マオ…旅続ける気なの？」

と母が聞くと

「もちろんだよーママー！」

と答えた。

「今回の事でどれだけ心配したことか…あなたは余分なことにまですぐに首を突っ込むから…。」

と母が言うとマオは

「今度から気を付けるよ…。」

と言つた。

「とにかくー、フタバタウンに帰るわよー！」

と母が言つとマオは

「いやよー、まだ始まつたばかりじゃないー！」

と言つが母は

「そんなこと言つてー、退院したら帰るわよー、これ以上危険なことがあつたら大変じゃないー！」

と言つた。するとそのやり取りを近くで聞いてた少年が

「いいじゃないですか…本人が行きたいって言つてるんですから…。」

「

と言つた。

「あなた勝手に人の話に入らないでくださいー。」

と母が言つとその少年は

「会話に勝手に入つたのは謝りますが…娘さんの意思も少し尊重し

てあげたりどうかと。」「

と言つた

じ母が言ひと少女は

「だったら俺とポケモンバトルしませんか？俺が勝つたら俺達と旅をするということです。今この場にはいないんですけど幼なじみと二人でホウエン地方から來たのでシンオウ地方の人がいれば心強いですのです……やりますか？」

アラビア語

「いいであります。どうぞあなたは」と、
と言つた。

「俺はカナズミシティ出身のソウヤと聞います…三対二のシングルバトルでどうですか？」

とソウヤが聞くと母は

ええ…もちろんいいわよー。」「

卷之三

その頃花屋ではユキとアキがまだ花を選んでいた。

「これに決めた！」

アキが言い会計を済ませると、

「…なん時間…急がないと…」

と言しながら小走りで花屋を出た。すると向こから来た少女と肩がぶつかつた。

「すいません！」

とヨキが言つとその少女は

いえいえ……とにかく男の子のみませんでした？私と同じ年くらいで

「いえ…見てませんけど…。」

とユキが言つと少女は

「そうですか…。」

と言つた。

「よかつたら私たちも探すの手伝いましょうか？」

とアキが言つと少女は

「ほんとうですか？私はイリスと言います…。」

と言つた。

「私はアキです！」

「私は…その…ユキと言います…。」

と一人がそれぞれ自己紹介するとイリスは

「アキさんにユキさんですね…よろしくお願ひします…といひで
お二人はなにか用事があるよう見えるのですが…。」

と言いながらユキが持つている花を見た。

「これは…ちょっと友達のお見舞いに…。」

とアキが答えるとイリスは

「それでは先にそつちを済ませましょ…もしかしたらそこへ行く
途中で会えるかもしれませんし…。」

と言つた。

「それじゃあ…病院から行こうか…」

とアキが言つとユキは

「もしかしたら…その病院に行く途中に大きな罠があつてそれで因
的は…」

と言つがアキは

「あーもう一物事を悪い方にばかり考えてると本当にそつなるわよ
！」

と言つながらぶつぶつ言つてゐるユキの手を引いて歩きだした。

ふたたびマオ達…

三人が病院の敷地内にあるバトルフィールドに来ると母は

「マオ！審判やつて…」

と言った。

「はいはい……。」

と答えるとマオは一人の間に立ち

「これより—フタバタウン出身のマナ対力ナズミシティ出身のソウヤのバトルを開始します！使用ポケモンは三体どちらかのポケモンがすべて戦闘不能になつた時点で終了します！それではバトルはじめ！」

と言つた。

そんな様子を見る三人組

「あの小娘結構元気になつてきてるじゃない……そろそろメカもできてるでしょから徹底的に足止めをせるのよー」

とエリが言つとダイキは

「それで……なんだつてあんなところに……。」

と文句を言つとマリコは

「エリさんにしてはまともな作戦じゃない……。」

と言つたがダイキは

「いや……目的が復讐つて時点でもとじやないからね……つてゆうかマリコいつのまに乗り気になつてるのでさつきまでは任務が優先とか言つてたじゃん……。」

と言つた。するとマリコは

「そうでしたつけ……そつこつことは録音しつけダメガネ！」

と言つて放つた。

「何で急にダメガネ呼ばわり！つてゆうか俺メガネかけてねーし！…とダイキが言つたがエリは

「とにかく！つて徹底的にやるわよー。」

と言つてマリコはその横で

「おー！」

と言つてこゑ。

「はーどうなる」とやう。

と並んでダイキのつぶやきは夕焼けの空にむなしく消えて行った。

つづく…

第十話 ホウハウ地方のトレーナー（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

なおソウヤとイリスはリクエストで登場したキャラです。

これからもよろしくお願いします。

第十一話 バトル開始！マナムンウヤ

「トブキシティで開催されるポケモンコンテストに出場するため旅に出ていたマオとユキはマオが入院したためマサガタウンにいた。

「バトル開始！」

と夕田を背にマオが言うと母は

「まずはこの子よ！行つて！ポッチャマ！」

と言ふポッチャマを出した。

「キルリア！バトルスタート！」

と言いながらソウヤがキルリアを出した。

『キルリア かんじょうポケモン ラルトスの進化系 サイコパワー』でできた空間の裂け目から未来の出来事を見る力がある。晴れた朝は気分良く踊るといわれる。タイプはエスパー。』

「ポッチャマ！先手必勝つてことでバブルこうせん！」

ポッチャマがバブルこうせんを出すと

「キルリアかわしてれいとうパンチ！」

とソウヤが指示を出す。キルリアはバブルこうせんをかわすとれいとうパンチを繰り出しポッチャマに迫る。

「ポッチャマ！うずしお！」

れいとうパンチを出しながら迫つていたキルリアはそれに飲み込まれてしまふ。

「ポッチャマ！つつく！」

「キルリア！テレポートで脱出してエナジーボール！」

と言ふ指示を聞きキルリアはテレポートでうずしおから脱出した後エナジーボールを放つ。

「ポッチャマ！つつくで破壊して！」

エナジーボールはポッチャマに迫るがポッチャマのつつくで破壊される。

(「の戦術…どこかで…。）

とソウヤが考え始めるが

「ポッチャマ！バブルこうせん！」

ふたたびばぶるこうせんが飛んできたため一回考えることをやめ

「キルリア！かわせ！」

と指示を出す。

(思い出せ…どこで見たんだ…確か…。)

「ポッチャマ！連続でバブルこうせん！」

「キルリア！全部かわしてエナジーボール！」

ポッチャマは次々バブルこうせんをだしキルリアはそれをかわし続ける

(うずしあで閉じ込めて動きを止めておいてつづくで攻撃する…さら後にその後のエナジーボールをつづくで…とく破壊している…かなり厄介だな…でもエナジーボールは草タイプの技で水タイプのポッチャマにあたれば効果は抜群…この攻撃の突破口は…どこかで見てるはずなんだ…またよ…確かにマナさんはフタバタウンの出身…。)

と考えていたソウヤの頭にある「一ディナーターの名前が浮かんだ。

「キルリア！テレポートで後ろに回つてエナジーボール！」

キルリアはポッチャマの背後に回るとエナジーボールを出した。突然後ろから攻撃されたポッチャマはエナジーボールが直撃してしまった。

「ポッチャマ！立つて！」

とマナの声を聞き少し立ち上がるがポッチャマは倒れてしまった。

「ポッチャマ！戦闘不能！キルリアの勝ち！」

とマオが言つとマナはポッチャマに駆け寄り

「ポッチャマ…よく頑張つたわね…ゆっくり休んで…。」

と言つてモンスターボールに戻した。

「なかなかやるわね…次はこの子よ！行つて…ブイゼル！」

『ブイゼル うみイタチポケモン フローゼルの進化前 首にあ

る浮き袋に空気をためると浮き輪のよつに膨らみ水面に顔を出した
浮かぶ タイプはみず。』

(ブイゼルか…バシャーモだとタイプからして不利だな…。)

「キルリアこのままいけるか?」

とソウヤが聞くとキルリアはソウヤの方を向きうなずいた。

「一気に決めるぞ! キルリア、エナジーボール!」

「ブイゼル…れいとうパンチではじいて!」

キルリアはエナジーボールを放つがブイゼルが二とくればいとうパンチではじく

(このブイゼルもかなり鍛えられている…でも、ブイゼルは水タイブ…エナジーボールが当たれば効果は抜群…だつたら!)

「キルリア! サイコキネシスからエナジーボール!」

キルリアはサイコキネシスでブイゼルを持ち上げてからエナジーボールを放つが

「空中だからって何もできないなんて大間違いよ! ブイゼル! そのままアクアジェット!」

ブイゼルのアクアジェットは落下する速度も加算されエナジーボールとぶつかった。フィールドで爆発が起こりあたりが煙に包まれる。煙が晴れるとキルリアとブイゼルが立っていたがキルリアは先ほどのポツチャマから受けたダメージからか倒れてしまった。

「キルリア! 戦闘不能! よつて勝者ブイゼル!」

とマオが言うとソウヤはキルリアをモンスターボールに戻し

「お疲れ様。」

と言った。

「さてと…これで後はお互いに一休ずつ…。」

とマナが言うとソウヤは

「次はこいつです! 行け! バシャーモ!」

と言いバシャーモを出した。

つづく…

第十一話 バトル開始！マナマシンウェヤ（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからもよろしくお願ひします。

第十一話 一進一退・マナバソウヤ

「トブキシティで開催されるポケモンコンテストに参加するため旅をしていたマオとユキはマサガタウンにいた。

「次はここです！行け！バシャーモ…」

と言いソウヤはバシャーモを出した。

『バシャーモ もうかポケモン ワカシヤモの進化系 パンチやキックなどの格闘わざを身に付ける。数年』とに古くなつた羽が燃えて新しくしなやかな羽に生え変わる。タイプはほのあ・かくとう『バシャーモ 確かホウエン地方の初心者用ポケモンの最終進化系だつたかしら…。』

とマナが言つとソウヤは

「ええ！ そうです！」

と答えた。

「バシャーモはほのあタイプ！ 一気に決めるわよ！ ブイゼル、アクアジョット！」

ブイゼルはバシャーモに向けアクアジョットで迫る。

「バシャーモ… よけてかみなりパンチだ！」

ブイゼルはアクアジョットでバシャーモの迫るがぎりぎりでバシャーモにかわされかみなりパンチを受けてしまった。

「かみなりパンチ… なかなかやるじゃない… 接近戦が無理ならブイゼル！ みずのはどう！」

ブイゼルはみずのはどうを放ちそれはバシャーモに迫る。

「バシャーモ！ よける…」

「ブイゼル！ アクアジョット！」

バシャーモは上にはねてよけるがブイゼルのアクアジョットに直撃してしまった。

「バシャーモ！」

「ええ！」

バシャーモはソウヤの呼びかけにこたえるかのよつて立ち上がる。

「バシャーモ…まだいけるか？」

とソウヤが聞くとバシャーモはうなずいた。

「それじゃあ…バシャーモ…かみなりパンチ！」

「ブイゼル！…れいとうパンチ！」

バシャーモとブイゼルはそれぞれ攻撃を出しながら衝突しあ互いの技がぶつかり爆発した。

煙が晴れると二体とも立っていたがお互いを見た後倒れてしまった。

「ブイゼル、バシャーモともに戦闘不能…よつてこの勝負引き分け！」

とマオが言うと一人はブイゼルとバシャーモをそれぞれモンスター ボールの戻し

「よく頑張つたな…ゆつくり休んでくれ…。」

「ゆつくり休んでて頂戴…。」

とそれぞれ言った。

「なかなかやるわね…でも、この子は早々負けないわよ！」
と言いながらマナがモンスター ボールを構えるとソウヤは
「俺だつて負けませんよ！」

と言いモンスター ボールを持つた。すると一人は

「最後はこの子よ！行つてフカマル！」

「最後はこいつです！行けフカマル！」

と言ひながらお互いにフカマルを出した。

そんな様子を見る三人組

「ねえ…エリ、ダイキ…あのソウヤとかいう人…どこかで見たことあるような気がするんだけど…。」

とマリコが言うとダイキは

「言われてみれば…どつかで見たことあるような気がするな…。」
と言つた。するとエリは

「確かにホウエンリーグに出てたわね…。」

と言った。

「さうそう…思い出しました…確かにホウエンリーグでベスト8でしたね…。」

とマコロが言つてHリは

「だったら復讐ついでにあいつのポケモンもいただきましょー!」

と言つた。するとマリコは

「復讐までならまだしもそれは欲張りすぎじゃ…。」

と言つてダイキは

「だから復讐までほつて何?復讐よりやるこりあるんじゃなかつたの?」

と言つたHリは

「考えてもみなよ…たとえばさつきのキルリアを捕まえてサカキ様に献上すれば…。」

と言いダイキが

「どうなるんだよ?」

と言つたHリは

「サカキ様はいつも忙しくあいつを移動されてるでしょ…。」

と言つてマコロは

「ええ…まあ…。」

と相槌を打つ

「でも…』しまった!忙しすぎて間に合わないー』っていうような

ときには私たちが献上したキルリアがやってきて…テレポートでサカキ様を時間通りに田的池へ…』ふう…間に合ってよかつた…これもあいつらが送つてきてくれたポケモンのおかげだ…何か褒美をやらねば…。』となれば…。』

とHリが言つとマコロは

「なるほどー。」

と言つてHリとマコロが

「「幹部昇進！スピード出世で絶好調！」」

と一人で言つがダイキは

「やんなにうめくこくのか？」

と言つた。するとHリは

「セイを何とかするのがあなたの仕事でしょ？が！」

と言つた。するとダイキは

「やっぱ…ってゆうかあつた仕掛けた罠にハマるかかってる

ことじやないの？あいつの仲間…。」

と言つた。するとHリは

「やうね…ちょっと見に行きましょうか…。」

と言つわなを仕掛けた場所へ歩き出した。

つづく…

第十話 一進一退・マナ・ソソウヤ (後書き)

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第十二話 決着！マナ vs ソウヤ

「トーナメントで開催されるポケモンコンテストに出場するためコトブキシティへ向かっていたマオとコキはマサガタウンにいた。

「フカマル同士ね…。」

とマナが言うとソウヤは

「そのようですね…。」

と言った。

『フカマル りくザメポケモン ガバイトの進化前 大口を使った攻撃は威力が十分だがまだうまく戦えず自分も傷つく。 タイプはドラゴン・じめん』

「フカマル！ りゅうのいかりよ！」

とマナが言うとソウヤは

「いっちもりゅうのいかりだ！」

と指示を出した。二つのりゅうのいかりはフィールドの真ん中でぶつかる。

「威力はほとんど同じか…。」

とソウヤが言うとマナは

「そのようですね…私、これでもシンオウリーグベスト8なんですが…。」

と言った。するとソウヤは

「やはりそうでしたか…かつて『コーディネーター』でありながらジム戦もこなし、グランドフェスティバルで優勝し、さらにシンオウリーグベスト8という成績を残して引退した伝説の『コーディネーター』…その独特的の戦術の組み立てからついた名前はシンオウの奇術師マナ…その当時としては斬新なバトルスタイルは多くの『コーディネーター』が現在も参考にしている…それがあなたですよね…。」

と言った。

「あら… ホウエン地方のトレーナーなのによく知ってるわね… 私が引退したきっかけはマオの事があつたらで5年も前なのに…。」

とマナが言つとソウヤは

「俺がまだ子供だったころ俺が住んでいる街で開かれたポケモンコンテストを幼なじみに連れられて見に行つたとき偶然見たんですけど… それで興味を持つてあなたの事を少し調べていたんです… それで少しそうでないかと疑つていたのですが… ついさっきマナさんが言つたシンオウリーグベスト8つていう言葉で確信しました… あなたの「コーディネーター」だつて…。」

言つた。

「あら… その幼なじみに感謝しどきなさい… でもいくら情報を知つても私に勝てるとは限らないわよ… フカマル！ あなたをほる！」

とマナが言つとソウヤは

「こっちもあなたをほるだ！」

と言い地面の中で双方の技がぶつかる。

「ひつなつたら… フカマル… じゅうせいぐん！」

とマナが言つとソウヤは

「まずい！ フカマルよける！」

と指示を出すがマナのフカマルが出したりゅうせいぐんはソウヤのフカマルに直撃した。

「フカマル！」

とソウヤが言つとフカマルは立ち上がりソウヤの方を見た。

「フカマルにドラゴンタイプの技は効果抜群… かなりのダメージを受けたんじやない？」

とマナが言つとソウヤは

「まだまだ… フカマル！ あなたをほる…。」

と言つた。

「いくらやつても無駄よ… フカマル… 相手の居場所を見つけて…。」

とマナが言つとソウヤは

「フカマル！ 地面から出でドリルコンクリー！」

と言った。とつぜんマナのフカマルの背後から出たソウヤのフカマルはドラゴンクロールを命中させ突然後ろから攻撃を受けたマナのフカマルは吹っ飛ばされた。

「フカマル！」

とマナが言つとマオが

「フカマル！ 戦闘不能！ よつて勝者カナズミンティ出身のソウヤ！」

と言つた。マナはフカマルに駆け寄ると

「頑張つたわね…。」

と言つてからソウヤの方を向き

「なかなかですね… 実力はもとよりあなたのポケモンはあなたをかなり信用していますね… これだったらマオと旅させても大丈夫だと思います… よろしくお願ひします…。」

と言つた。するとマオは

「すういね！ ママに勝つなんて！ これからよろしくね！ ソウヤ！ とこりで一緒に来たつていう幼なじみはどこにいるの？」

と言つた。するとソウヤは

「そういうば… 確か… 用があるからつて言つから俺が先にシンオウに来て… 後から来るつて言つてたから… そういうば今日は何日だ？」

と言つた。マオが今日の口付を告げるとソウヤは

「そうだ… 今日だつた！」

と言つた。

「えつ！」

とマオが言つとソウヤは

「少し探してくる…！」

と言つてその場を後にした。

ちょうどそのころ病院の入り口に続く道を歩いていたユキ、アキ、イリスは落とし穴に落ちていた。

「もーなんなのよ…。」

とアキが言つと見覚えのある三人組が出てきて

「もーなんなのよ…と言われても答えないのが常識だが…まあ今回
ぐらいは答えてやる!」

「光よ!」

「水よ!」

「ポケモンよ!」

「天をも震わせる!!ユージック」

「海に帰りし美しきビーナス」

「神か閻魔かその名を呼べば」

「誰もが立ち止まる重い響き」

「エリ…」

「マリ…」

「ダイキ!」

「今回も主役は私たち…」

「我ら天下無双の」

「…ロケット団…」

と名乗るとエリが

「あなた達はしばらくそこにいなさい…。」

と言い三人はその場を後にした。

つづく…

第十二話 決着—マナマシノウヤ（後編）

読んでいただきありがとうございました。

これからもよろしくお願いします。

「トブキシティで開催されるポケモンコンテストに出場するため旅に出ていたマオとユキはマサゴタウンにいた。

ユキとアキそしてイリスはロケット団の掘つた落とし穴に落ちていた。

「何なんですか…あの人たち…。」

とイリスが言うとアキは

「人のポケモン奪つたりする悪い人たちよ！」

「どう、どうも、おつかれさうが、おつかれさうかな……おつかれさう……」

「…から出れなくて…それで…」

「ここはマサゴタウンのはずれとはいえ病院へ続く唯一の道なのよ！ つか助けが来るって！」

と言つて励ました。するとイリスが

「それは結構先になるんじやないかしら？」

「アーティスト」

とアキが聞くとイリスは

「もう夜になるのよ…」この先にあるのは病院だけって言つてましたよね…だったらこんな時間に人は通らないと思いますけど…。」

「意見を述べた
「そういうえば……」。

「アキが血のトコキせ
「アキが血のトコキせ

と言つた。

と並んで二人の声は夜の闇に消えて行った。

マナとのバトルを終えたソウヤは焦つてマサゴタウンのポケモンセンターへ戻る所としたがマナが

「もう時間は遅いですしここにいたらどうです？山の上にあらこの病院から暗い夜道を通りてふもとのマサゴタウンに戻るのは危険ですし…謝ればその幼なじみも許してくれるんじゃないから？」

と言つたため病院にどどまつてゐる。

「そういえば…ユキちゃん遅いね…。」

とマオが時計を見ながら言つとソウヤが

「ここまで来るのが危ないからつてふもとここのんじやないのか？」

と言つた。するとマナが

「それならいいナビ…ユキちゃんの性格と並つか…なんといつか…。」

と言つた。そしてそのあとに「くじくじ」と言つた。

「そうだよね…やつぱり5年前からずっとそうよね…。」

とマオが言つた。

（5年前？そういうればマナさんが引退したのも5年前…マオの事がとか言つてたけど…5年前に何があつたんだ…。）

とソウヤが考へてみるとマオが

「ちょっとそこまで様子見てくる…。」

と言つて病院の外に出た。

「マオ！あなた入院してゐ身なんだからおとなしくしてなさい…。」

と言つながらマナが外へ出るとソウヤもそれに続いた。

ふたたび落とし穴の中…

「救助が来ない以上私たちで脱出するしかないと想います…。」

「イリスが言つとアキは具体的にどうやつて？」

と聞いた。

「そうですね… つるのむちとか使えるポケモン持つていませんか?」

とイリスが聞くとアキが

「だったら私フシギダネなら持つてますけど…。」

と答えた。するとイリスは

「それでしたらフシギダネを出していただけますか?」

と言つた。するとアキは

「いいけど…。」

と言いながらフシギダネを出した。

『フシギダネ たねポケモン フシギソウの進化前 生まれてから
しばらくの間は背中の種から栄養をもらつて大きく育つ。 タイプ
はぐさ・どぐ』

「フシギダネを使ってどうするの?」

とアキが言つとイリスは

「あそこの木につるのむちをひつかけてそれをひつて脱出するんで
す!」

と言つた。

「あーなるほど! それならいけそつ!」

とアキが言つとユキは

「もしかしたら… 途中でフシギダネが…。」

と言つがアキは

「フシギダネ! つるのむち!」

と指示を出した。フシギダネのつるのむちは木にしつかりと結びつ
いている。

「まずはイリスから行つて!」

とアキが言つとイリスは

「はい… わかりました…。」

と言つてからつるのむちを少し引つ張り登り始めた。イリスが上ま
で登り

「大丈夫ですよ!」

と言しながら手を振るとアキは

「次はユキちゃんよ行つて！」

と言つた。するとユキは

「いや……でも……アキちゃんは……。」

と言つた。するとアキは

「私なら大丈夫だから……必ずあとから行くよ……こんな六からぐらい出れるよー。」

と言つた。

「私なら大丈夫……必ずあとから……行く……。」

とつぶやくとユキは頭を抱え込んでしまつた。

「ちよつとーーびうしたの？ ユキちゃん！』

尋常でない様子のユキを見てアキはユキの肩を揺さぶりながら言つた。

「大丈夫ですか？」

と上からイリスの声が聞こえる。肩を揺さぶられているユキの頭に
ある男の子との会話が響いていた。

『なにをやつてるんだよーー早くマオと逃げろー。』

『でも……お兄ちゃんは？』

『俺は大丈夫だから……必ずあとから行くー。』

『絶対だよー。』

『もちろんだーーお前、お兄ちゃんとマオとこらめー。』

『うそー。』

『ねえー！ ユキちゃんつてばー。』

アキが話しかけるがユキは

「もういや…あの時みたいに…これ以上失いたくない…。
とつぶやきました黙つてしまつたあと意識を失つてしまつた。」

「ユキちゃん！」

つづく
…

第十四話 落とし穴の中で…（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからもよろしくお願いします。

第十五話 ロケット団の逆襲

「トプキシティで開催されるポケモンコンテストに出場するため旅をしていたマオとユキはマサ'ガタウンにいた。

マオが走っていると

「待てよ！マオ！」

と言いながらソウヤがマオの腕をつかんだ。

「ユキちゃんを探さないと！早くしないと！」

と言つマオをソウヤの後ろから追いかけてきたマナが

「マオ！病院に戻らないと！ユキちゃんなら大丈夫だから！」

と言つた。するとマオは

「あのときだつてそうじやない…タツヤ兄ちゃんなら大丈夫だからつてそう言つたのに！」

と大声で言つて泣き出してしまつた。

「今度は絶対に大丈夫よ！」

とマナが言つがマオは

「そんな保証がどこにあるのよ…5年前ママはそう言つてホウエン地方に行つちやつたじゃない！なんか変な感じがするのよ…あの時…ママがホウエン地方に旅立つ前の日に感じた…あの時の感じと…また何か大切なものがなくなる気がして…。」

と言つながらマオは泣き続けている。

その時巨大なメカがふもと側からやつてきた。

「何！あれ？」

とマナが言つと

「何！あれ？と言われても答えないのが常識だが…まあ今回ぐらいは答えてやるう…」

と言つ声と共にメカの頭の部分から三人組が姿を現して

光よ！」

水よ！」

「ポケモンよ！」

一天をも震わせる「デジタル」

「海に帰りし美しきビーナス」

神か閻魔かその名を呼べば上

誰もが立ち止まらし響き上

エリ!

二二八

「タニキ！」

—今回も主役は私達

我ら天下無双の上

「」「」「」「」「」

と名乗った。

「ケット団? 何でカントリーで暗躍している組織か?」

セイイチカツリヒコ

せよ、といた復讐よ……その娘にね！」

と書いたなかで右を指差した

何？逆恨み？

正義の精神

ええ……そんなどうです。

と云つた。すると横にいたダイキが

詰めるのかよ！」

と言ふ
た

なんかよくねかんね

かげた!

と言ひながら、ハリを出し、そのハリを出したり、ハリのいたり

はアガを直撃した

セハ一発に、ハのしかり、

とソウヤが指示を出すとヨリカ

「あら…ここのかしい…そんなことをして…。」

と言つとソウヤは

「待つた! フカマル!」

と言つたがもう攻撃はメカにあたつた。

「どうこうとだよ…。」

とソウヤが言つとエリは

「このメカとコキとかいうやつとアキとあと…一人…イリスとかいつたかしら…がいる落とし穴とこのメカにはある細工がしてあるの…。」

と言つた。

「細工ってなんだよ! 俺聞いてねーぞ!…」

「そうですよ! 私も聞いてません!」

とダイキとマリコが言つとエリは

「細工って言つても仕組みは単純…このメカが受けたダメージはそのまま落とし穴の人間に伝えられる…それがどういうこととかわかる?」

と言つた。するとマオは

「つていうことはさつきのりゅうのいかりのダメージは!」

と言つとエリは

「そつくりそのまま落とし穴の人間に伝わってこるので…どう

? 驚いた?」

と言つた。

「そんな手を使うなんて! 許せない!…」

とマナが言つとエリは

「許せなくて結構! それでこそ悪役よ!…」

と言つた瞬間メカが崩れ始めた。

「ちょっと…どうなつてるので…」

とエリが言つとダイキは

「予算が少なくて強度が弱いつえに変な細工するからだよ…。」

と言つた。するとエリは

「それじゃあ…まさか…。」

と言った。するとダイキは

「まあ…そのまさかだな…。」

と言つた瞬間にメカが爆発し

「「「やな感じー！」」

と言いながら三人は飛ばされて星になつた。

ちょうどそのころアキは何とかユキを起こして穴の外の脱出させた後に穴を出ようとした。その時なにか大きな衝撃を感じ狭い穴の中で吹き飛ばされた。

「キヤ！」

とアキが言うとイリスは

「大丈夫ですか？アキさん？」

と話しかけた。アキが

「大丈夫よ…何とか…。」

と言つて体を動かそうとするが足をけがしたらしく動けない。

「アキちゃん！」

とユキが言うとアキは

「ユキちゃん！イリス！誰か助けを呼んできて…ここからならすぐ
に病院に着くはずだから…。」

と言つた。

「でも…アキちゃん！」

とユキが言うとアキは

「大丈夫よ！絶対に！」

と言つた。するとユキは

「今度は大丈夫…今度は大丈夫…。」

と自分に言い聞かせるように言つたあとイリスと共に病院の方へ駆けて行つた。

「ユキちゃん…頑張つて…。」

とアキがつぶやくとまた大きな衝撃が襲いパラパラと壁が崩れ始め

る。

「これはちょっとやばいかもね…。」

とつぶやくと自分の持っているモンスター・ボールを穴の外に向かつて投げポケモンたちを外に出した。

そのあと大きな音とともにアキの意識は闇の中に沈んでいった。

つづく…

第十五話 ロケット団の逆襲（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

次回から新章に入ります。

これからもよろしくお願いします。

第十六話 アキの思い

マサゴタウンでの出来事からもうすでに一か月がたつた。アキは生き埋めになる直前に近くを通りかかったポケモントレーナーのポケモンが出したサイコキネシスで間一髪脱出できたがそれまでに受けたけががひどく旅をつづけるどころか歩くのも困難と診断された。あのロケット団三人組は指名手配されたがいまだ捕まらず、もともと孤児で身寄りのなかつたアキはマオの家に住むことになった。

シンオウ地方 フタバタウン マオの家

マオがいつも通り慣れた手つきで朝食を作っているとアキが車いすに乗つて出てきて

「おはよう…マオちゃん…。」

と言つた。

「アキちゃんーおはようー。」

とマオは元気よくあこせつを返すがあの日以来アキはまったく笑顔を見せない。

(まるである時のコキちゃんを見てるみたい…でもコキちゃんの方が重傷だつたかな?)

と思つていると台所に焦げ臭いにおいが漂つてきた。

「マオちゃん…。」

とアキに言われ現実に帰つたマオは

「いけない! 焦がしちゃつた!」

と言いながら焦げた卵を皿に盛り付ける。

そのあとマナがあぐびをしながら起きてきて

「また焦がしてゐるじゃない…まったく…トーストせつまく焼くのに

…。」

と言つながら真つ黒になつた明らかに体に悪そつた卵を食べる。朝

食を食べているとアキが

「あの…マオちゃん…。」

と話しかけた。

「どうしたの? アキちゃん…。」

とマオが言つとアキは

「マオちゃん…もつ旅に出るの? はないの?」

と聞いた。それに対しマオは

「うーん…確かに旅には出たいけど…アキちゃんの事ほつたらかしこして旅に出るわけにはいかないからずっとここにいるつもりよ…。」

と答えた。

あの後ソウヤとイリスは1週間ほどフタバタウンにいたがアキとマオに言われアキやマオそしてあの日以来部屋に引きこもつてしまつたユキの事を気遣いつつポケモンジムがあるクロガネシティへ向かつて旅立つた。

マオが黙つているとマナが

「もういえばわざわざ聞いたんだけどヒナ「わがやんが帰つて来るそりよ…今田の畠にまつべらしいからアキちゃんと行つて来たら? もちろん…ユキちゃんも誘つて…。」

と言つた。

「どうする? アキちゃん…。」

とマオが言つとアキは

「私も行く…。」

と言つた。

「ヒナコと会うの久しぶりだな!」

と言つながらマオは朝食を食べ終えアキの車いすを押してユキの家に向かつた。

一人がユキの家に行くとユキの母親が出てきて

「あら…マオちゃんにアキちゃんじやな…。どうがしたの?」

と聞いた。

「ママからヒナコが帰つて来るつて聞いたからユキちゃんと一緒に行いつかなかな?つて思つて…。」

とマオが答えるとユキの母は

「そうね…ちょっとと声かけてみるわ…。」

と言い家の中に入つて行つた。

数分後ユキの母はマオ達のところに戻つてきて
「ダメだつたわ…部屋から出る貯ないみたい…。」

と言つた。

「そうですか…私たちは広場にいるので氣が向いたら来るよつて言つておいてください…。」

と言つと一人は広場に向かつた。

広場に向かつて一人をユキは二階の窓から見ていた。
(私のせいだ…私がなかなか行かなかつたから…だからアキちゃん
が…出て行つても口きいてくれるわけないよ…マオちゃんだつて5
年前の事件の後しばらく口きいてくれなかつたもん…たぶんまたあ
の時みたいに…。)

とユキが思つてゐることを知つてか知らずか母がドアの向いつから
「マオちゃんが氣が向いたら広場に来て…だつて…行つてあげたら
?…さびしがつてたわよ…。」

と言つた。

「いいの…さつきも言つたでしょ…私は行かない!」
とユキが言つと母は

「やつ…。」

と答えて階段を下りて行つた。

そんな様子を二ヤース型氣球から見てゐる二人組

「やつと来れたわね…シンオウ…。」

「やつと来れたわね…シンオウ…。」

とHリが言つとマリコが

「ところで何でまたシンオウに来たんですか？私たち指名手配され
てますしそもそもマサゴタウンの一件で遊びになるところだったん
ですよ…。」

と言つそれに続くようにダイキが

「やうだよ…なんとか給与カットと2か月の特別指導で済んだんだ
おとなしくしておいた方がいいんじゃないのか？」

と言つた。するとHリは

「つるさいわね！一度ならず一度もやってくれたのよ！パパにもぶ
たれしたことないのに！三度目の正直って言葉があるでしょうが！」

と言つた。

「使い方間違つて…はいなか…でも任務を優先した方が…。」

とダイキが言つとマリコは

「どちらにしろシンオウでやっても任務には変わりありませんわ…
ただ予算が前よりかなり少ないので…あまり下手には動けませんね
…。」

と意見を述べる。しかし、Hリは

「任務はポケモンの大量捕獲。トレーナーのポケモンでも関係ない
でしょ…。」

と言つてからダイキの方を向き

「ダイキ！なにかメカを作つて！今度はひみつとじやや壊れ
ないやつ…」

とHリが言つとダイキは

「勝手な改造しないならね…。」

と言つた。するとHリは

「それは約束する…」

と言つた。

「わかつたよ…。」

と言つとダイキはメ力を作る場所を探しだした。

第十六話 アキの思い（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからもよろしくお願いします。

第十七話 帰ってきたヒナコ

フタバタウンに住み少女マオはひさしひぶりにフタバタウンに帰ってきたヒナコに会つためアキと共に広場に向かつていた。

「ねえ…マオちゃんはヒナコさんと知り合いなの？確かにグランドフェスティバルで上位を取つてと思つたんだ…。」

とアキが聞くとマオは立ち止まり

「うん…まあね…昔はよく遊んだな…コキやヒナコと一緒におままで…」とやつたりコウト君たち男の子の鬼ごっこと一緒にやつてみたり…それに…なによりもあのひまタツヤ兄ちゃんがいた…。

と答えた。するとアキは

「やうなんだ…。」

と言いながらマオの顔を見るとなんだか過去を懐かしむとこいつより悲しげな顔をしていた。

「マオちゃん…？」

とアキが言うとマオは我に返り

「何でもないわー早く広場に行きましょー！」

と言いふたたび車いすを押して歩き出した。

(マオちゃん…今すぐ悲しそうな顔をしてた…タツヤって人が何か関係あるのかな…)

とアキが考えているといつの間にか寝てしまった。

「ねえ…アキちゃん…。」

と話しかけながらマオがアキを見ると規則正しく寝息を立てている。(寝ちゃってるのか…だったら起こすのはかわいそつかな…。) と思いマオはそのまま広場に向かつて歩いて行つた。

広場に着くと寝ていたアキを起こしてヒナコが到着するのを待つた

10分ほど待つてみると

「マオちゃん…ひせじぶり…」

と言いながらヒナ「がやつてきた。

「久しぶり…キナ…」

とマオが言つとヒナ「は

「キナ」「じやなくてヒナ」「よ…ヒナ」「…まつたべ…マオちゃんまで

！」

と言つた。

「「めん…」「めん…前ヒカリが帰つてきたとき町の外に出かけて会えなかつたからさ…。」

とマオが言つとヒナ「は

「そりいえばこの子は？」

と言いながらアキを見た。

「この子は…。」

とマオが言つと大きな音とともにポッチャマ型のメカがやつてきた。

「つ…このポッチャマ大きくてかわいい…」

とマオが言つと

「つ…このポッチャマ大きくてかわいい…と言われても答えるのが常識だが…まあ今回ぐらには答えてやる…。」

と言つとあの三人組が姿を現し

「光よ…」

「水よ…」

「ポケモンよ…」

「天をも震わせるミュージック」

「海に帰りし美しきビーナス」

「神か閻魔かその名を呼べば」

「誰もが立ち止まる重い響き」

「ヒリ…」

「マリ…」

「ダイキ…」

「今回も主役は私たち…。」

「我ら天下無双の」

「「「ロケット団！」」」

と名乗つた。

「しつこいわね！またあなた達なの！」

とマオが言つとヒナ「が

「ロケット団つてシンオウにもいたんだ……。」

と言つた。

「そんなこと言つてゐる場合じやないでしょ！」

とマオが言つとヒナ「は

「やうよね！ポッチャママ・バブル」うせん！」

と肩に乗つていたポッチャママに指示を出した。

「ちよつとやせつとの攻撃じやあ」のメカは……。」

とエリが言つとダイキは

「いや……これはまずいな……マオやヨキのポケモンの攻撃ぐらにならまだしも相手は凄腕のコーディネーターだから……。」

と言つだしマリコが

「なにか反撃は？」

と聞くとダイキは

「ない」ともない……巨大バブルこうせん発射！ポチッとな！」

と言つながらボタンを押すとメカポッチャママの口から巨大なバブルこうせんが発射された。

「やるじゃない！こっちのボタンは？」

と言つながらエリがボタンを押すとするとダイキが

「ちよつとーそっちのボタンは！」

と制止しようとしたがエリはボタンを押してしまつた。すると突然

画面に

「自爆装置作動」

と表示された。

「どうこつ」とよー」

とエリが言つとダイキが

「予算が余ったから自爆装置付けてみました…」

と言つた。

「そんなん付ける必要ないでしょ…」

とヒリが言つと

「3…2…1…0…」

とカウントされ

「それじゃあ…やつぱり…。」

と言つた瞬間メカが爆発した。

「まつたく！変な機能付けないでよ…。」

と飛ばされながらヒリが言つとマリコが

「あなたも人のこと言えないとんじやない…。」

と言いダイキが

「それじゃあそろそろ…。」

と言つと三人は

「…やな感じ…。」

と言つてキラーンとお星さまになつてしまつた。

飛んで行つたロケット団を見てヒナコは

「ロケット団つてうわさには聞いてたけどよく飛ぶのね…。」

とつぶやいた。

「やうだ…結局その子はだれなの？」

とヒナコが聞くとマオはアキについて簡単に説明した。

ヒナコは話を聞くと

「そなん…ロケット団許せないわね！アキちゃん！大丈夫！き
つとあんな奴ら…。」

と言つたがマオが

「ヒカリと一緒にヒナコが大丈夫！つて言つときせ一番危ないよね
…。」

と言つた。するとヒナコは

「もうかな… そうだ… それあの話だとマオちゃんもつ旅に出ないの？」

と聞いた。マオが

「そうだね…」

と答えるとヒナ「は

「それならひとつ提案があるんだけど…。」

と言った。

「提案？」

とマオが聞き返すとヒナ「は

「あのね…。」

と話しが始めた。

つづく…

第十七話 帰ってきたヒナコ（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからもよろしくお願いします。

第十八話 再出発 マオの決意

フタバタウンに住む少女マオは今日ふたたび旅立とうとしていた。

マオは旅支度をしながら

「それにしても…ヒナコに言われなかつたら考え付かなかつたな…」

「

とつぶやき昨日の事を思ひ出していた。

「マオちゃん！旅に出でるヒナちゃんやアキちゃんを元気にでせるん
じゃないの？」

とヒナコが言つとマオは

「でも…私が離れると…。」

と言つた。するとヒナコは

「大丈夫！マオちゃんの夢をあきらめないでもコンテストに出場し
てアキちゃんの夢もかなえればいいのよ！マオちゃんならできるわ
て！」

と言つた。するとアキは

「ヒナコさんの言つとおつね…私もマオちゃんがここにくるより私
の代わりに夢をかなえてくれるなつさびしくなんかな…よ…」

と言つた。するとマオは

「わかった！また旅に出るわ！それでコンテストもジム戦も両方き
つちりとやる…」

と言つた。

「やのこさよ…」

とヒナコが言つと横のポッチャマもやつしれども言つてこぬよつ
だつた。

「これで良し…と…。」

と黙つとマオはトーストを焼いて食べてから家を出た。マオはヒコザルをボールから出すと

「ヒコザル！新しい旅の始まりよ！」

と言つた。するとヒコザルは飛び上がって喜んだ。

（アキちゃん…コキちゃん…私頑張るからね…）

と決意を新たにしふたバタウンの入り口まで来ると

「遅かつたですね…。」

と声をかけられた。すると

「ほんと…俺らを一ヶ月も待たせるなんてな…。」

と別の声がしてソウヤとイリスが現れた。

「ソウヤ！イリス！」

とマオが黙つとソウヤは

「マナさんと約束したからな…お前と旅するつて…。」

と言いそれに続いてイリスが

「一人で旅するよりもより大勢の方が楽しいでしょ…だから、これから一緒に旅をするのでよろしくお願ひします…マオさん…。」

と言つた。

「もうろんよ！」

とマオが答えるとソウヤは

「それじゃあどうするんだ？まずはクロガネシティへ向かうか？」

と言つた。するとマオは

「そうしようか！クロガネシティへはマサゴタウンとゴトブキシティを通つて行くと確実なはずよ…。」

と言つた。するとイリスは

「そういえば…コキさんが見当たらぬいよつですが…やつぱりまだ

…。」

と言つた。

「…まだにね…だから私はアキちゃんの夢やコキちゃんを元気にするためにはポケモンコンテストにも挑戦する…。」

とマオが黙つとイリスは

「ポケモンコンテストとジム戦ですか…少し難しいのでは?」

と聞いた。するとソウヤが

「無理ではないだらうな…実際にマオの母親であるマナさんはコンテストとジム戦、両方こなしてゐからな…。」

と答えた。

「それじゃあそろそろ行こうか…」

とマオが言つとイリスは

「やうですね…出発しましようか…終わりのない遙かなる旅へ…」

と言つた。マオが

「ええ…」

と答えると二人はマサゴタウンへ向け旅立つた。

そんな様子を上空から見つめる二人組

「どうやらフタバタウンを離れるようね…。」

とヒリが言つとダイキは

「まだやるのか?」

と聞いた。

「もううんよ!」

とヒリが答えるとマリゴが

「ヒリさん…深追いは厳禁ですしこれ以上はさすがに上も黙つてしませんよ…。」

と抗議した。

「とにかく!あいつらのポケモンをサカキ様に獻上するまでは二つ
ちに集中するわよ!」

とヒリが答えるとダイキは

「まったく…どうなつても知らねーよ…。」

と言つてから

「とな言つても上の連中はイッショウ制圧作戦で忙しいからそれなりに動きやすいかな…。」

とつぶやいた。

その頃フタバタウンのマオの家

一行二ちゃんちやいましたね……でも本当によが二んでですか？」

「アキラ君」と「アキラ」

「いいのよ…これで確かにコンテストとジム戦の両立は大変だけどそれだからこそ思いつく戦法があるし何よりせつかく旅に出るんじるもの…たくさんいろんなことも経験しなきゃもつたひないわ…。」と答えた。

「経験ですか…そうですね…ソノオタウンの孤児院から旅立つて時には急いで…時には寄り道して…あつちこつち旅したけど孤児院にいたら経験できないことがいっぱいありました…。」

「それにして...少しだがしふくなねね...。」

と書いてから少し間を置き

…といふあなたに…で呼んでもいいかしら…あなたとずっと暮らすんだし…いつそのこと養子にでもならない

〔二〕

「聞いた。するとアキ
「いいんですか?」

と聞いた

「ええ…あなた悪い子じゃないしどんな形にせよ家族が壊えるのは喜ばしいことだから…。」

トマナが言ふとアキは

（まあ……かわいいわね……なんだかこんな表情始めてみる気がするわ……よっぽどうれしかったのね……。）

「それじゃあ匂^いこはんでも作るから待つてねー。」
と言つて台所へ向かつた。

ソウヤ、イリスと共にふたたびフタバタウンから旅立つたマオ。
これから彼女はどんな旅路を歩むであろうか？

つづく
...

第十八話 再出発 マオの決意（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからもよろしくお願いします。

第十九話 語られる5年前の事件

クロガネジムに挑戦するため旅をしてくるマオは途中イリスに意見でシンジ湖に来ていた。

「「こ」がシンジ湖ですか…やはりシンオウ三湖に数えられるだけありますね…。」

とイリスが言うとマオが

「そうね…5年前まではこのへんにも人が住んでいたんだけどね…。」

と言った。

「そういえば…気になつてたんだけど…マオの話だとユキの現在の人格が形成されたのもマナさんがマオのことを理由に引退したのも5年前…5年前に何かあつたのか?」

とソウヤが聞くとマオは

「5年前…私が住んでいた町はフタバタウンより西にあつたのもつとわかりやすく言うとシンジ湖の西岸から西に行く旧道があるんだけどその先に私たちが住んでいたコハンタウンっていう名前の町があつたの…とは言つてもコハンタウンの住人はみんなフタバタウン出身だって名乗るんだけど…5年前まで私たちはそこに暮らしていた…。」

と言つた。イリスが

「それじゃあどうしてフタバタウンへ引っ越したのですか?」

と聞いた。するとマオは

「単純よ…もうないのよ…。」

と言つた。ソウヤが

「もうないって…。」

と言つとマオは

「ええ…5年前コハンタウンは謎の集団に襲われたの…その時町一

番の実力者だつたママはホウエン地方でポケモンコンテストのカナズミ大会に出場していた時だつたわ…。」

と言つとソウヤは

（5年前のカナズミ大会…確かにリスと見に行つたときの実質ママさんの引退試合となつた大会か…この大会への参加を最後に突然引退したんだよな…。）

と思つているとマオは

「せつからくだから行つてみようか…コハントウンがあつた場所…。」

と言ひながら西の方へ歩き出した。

シンジ湖から西に延びる明らかに長い期間人が通つていらない道を進むと少し開けた場所に出た。

「ここに…私たちの町があつたの…。」

とマオ言うと近くの切り株に座り

「あれは…5年前…」

と語りだした。

5年前…

「ユキちゃん！タツヤ兄ちゃん！お母さんが出でるコンテスト始まるよ！」

とマオがテレビの前で言つとユキは実の兄であるタツヤとともに現れ「まったく…マオつたら…テレビは逃げないから急がなくていいじやない…。」

と言つた。その時外で爆発音が聞こえた。

「何が起きたの？」

とマオが言うとタツヤは

「お前たちはここにいろ！俺が様子を見る！」

と言つて外の出た。

数分後タツヤは戻つてきて

「大変だ！変な集団が町を襲つてゐる！俺はいいから早く逃げろ！」

「言つとマオは

「わかつた！ フタバタウンまで行つて助けを呼んでくる。」

と言つて外の出るため靴を履いた。コキがタツヤのやばで立つて、
るとタツヤは

「なにをやつてるんだよ！ 早くマオと逃げろ。」

と言つた。

「でも… お兄ちゃんは？」

とコキが聞くとタツヤは

「俺は大丈夫だから… 必ずあとから行く。」

と答えた。

「絶対だよ！」

とコキが聞くとタツヤは

「もちろんだ！ お前もちゃんとマオと一緒にいこう。」

と言つた。するとコキは

「うそ！」

と答えてマオと共に家を出た。

「それが… タツヤ兄ちやんとの最後の会話だった… そしてその口を
最後にコハントウンは地図から消滅したの…。」

とマオが言つとイリスは

「そんなことが…。」

と言つた。

「でも… いつたい誰がそんなこと？」

とソウヤが言つとマオは

「わからない… 5年たつた今でも…。」

と答えた。それから少し間を開けてから

「でも！ 私、がんばるつて決めたんだ！ ねつヒコザル！」

と言つと網が飛んできてヒコザルをとらえそのあとから来たマジックハンドに残りのポケモンが入ったモンスター・ボールがとられてし

ました。

「いつたいなんなの？」

とマオが言うとニヤース型の気球に乗つたいつもの三人組が現れ
「いつたいなんなの？」と聞かれても答えないのが常識だが、まあ今
回ぐらいは答えてやるわー。」

「光よ」

「水よ」

「ポケモンよ」

「天をも震わせるミュージック」

「海に帰りし美しきビーナス」

「神か閻魔かその名を呼べば」

「誰もが立ち止まる重い響き」

「エリー！」

「マリ！」

「ダイキ！」

「今回も主役は私たちー。」

「我ら天下無双の」

「ロケット団ー。」

と名乗つた。

「またあなた達ですか…いい加減にしてほしーわね…。」

トイリスが言うとエリは

「いい加減も何も悪役はしつこいのよー。」

と言つた。

「それじゃあわつたと帰る？」

とダイキが聞くとエリは

「そうね…さつさと行きましょつか…と言いたことじりだけじ…。」

と言いながらマオの方を向き

「徹底的に仕返しするわよー。」

と言つた。ダイキはため息をつきながら

「まったく…そろそろ手柄上げないと幹部昇進どころか降格食らう

んじやないか？」

と意見を述べた。

「確かにそうですね…これ以上の失敗はまずくないですか？」

とマリコが言うとエリは

「とにかく…やるわよ！」

と答えた。するとダイキは

「エリには悪いけど…今日は本気で帰るから…ポチッと…」
と言いながらボタンを押すと気球は上空へあがり東の方へ飛行し始めた。

「ちょっと待ちなさい…」

とマオが大声で言うとダイキは

「待つてって言われて待つ悪役はいませんよ…」

と返した。

「とにかく追いかけましょ…」

とイリスが言うと二人は

「もちろんだ…」

「当然よ…」

と答える三人は気球が飛んで行つた方向へ走り出した。

つづく…

第十九話 誰が5年前の事件（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからもよろしくお願いします。

第一十話 マコト登場！

クロガネシティでジム戦に挑戦するためソウヤ、イリスと共に旅をしていたマオはロケット団にポケモンを奪われてしまった。

「こーらー待ちなさい！」

とマオが言つとHリは

「まだ追つてくるわよー！」

と言つとダイキは

「だつたら…これで…。」

と言いながらボタンをだし

「ポチットな！」

と言つてボタンを押した。だが何も起こらない。

「おかしいな？」

と言いながらダイキがボタンを押すがやはり何も起こらない。

「残念だな…そのボタンで動く装置は僕がすべて破壊した…ついでにしたのポケモンをとらえている網もね…それにしてもマオ…こんな奴らにポケモン奪われるなんて…まだまだだな…。」

と言う声がした。声がした方を向くとそこには黒い髪を短めに切りメガネをかけた人物が立つっていた。

「マコト…どうしてここに？」

とマオが言つとマコトは

「久しぶりにシンオウに帰つてきたから少しあの場所に寄つて行こうと思つてね…そしたらポケモンをこんな奴らに奪われているマオを見つけたつてわけだよ…とにかくわざとけりをつけよひじやないか！リザードン…かえんほうしゃー！」

『リザードン かえんポケモン リザードの進化形 苦しい戦いを

経験したリザードンほど炎の温度が高くなると言われている。タ

イプはほのお・ひこづ』

リザードンが放つたかえんほづしゃは気球に命中し爆発した。

「今度はなつかしくて困ったのですが……。」

「マコトが言うと、ダイキは

「結局さつと逃げても結果は変わらないんだな……。」

とつぶやきHリが

「それではみなさま……。」

と言つと三人は

「……やな感じ……。」

と言つながら飛んでこきキラーンとお星さまになつた。

「へー見事に飛ぶものだね……。」

ヒマコトがつぶやくとこっちを向いて

「君たちは……。」

と聞いた。マオが

「このちの男の子はソウヤ。それであつちの女の子がイリス。」

と一人の事を紹介するとマオはソウヤとイリスの方を向き

「この子は私の幼なじみのマコト……あの日、あの時間、コハントンに居て生き残つた5人のうちの一人よ……でも、私と同じで出身地はフタバタウンになるわけだけど……。」

とマコトの事を紹介した。

「ところで君たち三人ともポケモントレーナーみたいだけど……僕とバトルしない?」

とマコトが聞くと三人は

「別にいいわよ。」

「俺もちゅうどバトルがしたかったところだ。」

「久しぶりにやうつか!」

と答えた。するとマコトは

「それじゃあ……せつかぐだからマオ! やうつか? 使用ポケモンは――

体……どう?」

と聞いた。マオが

「ええ! もうろんよ!」

と答えるとマコトは

「それじゃあソウヤとイースさんはまた後田…マサニタウン에서도やつましょつか…。」

と言つとマオが

「あなた私以外の女性をさん付けで呼ぶのは相変わらずなのね…。と「以外」の部分を強調していった。そのあとソウヤが

「わかった…それじゃあ俺が審判をやるわ…。」

と言い一人の間に立つて

「これよりフタバタウン出身のマオ対同じくフタバタウン出身のマコトによるポケモンバトルを始めます…使用ポケモンは一体…どちらかのポケモンが戦闘不能となつた時点で勝敗が確定します…それではバトルはじめ…」

とマコトが言つとマオは

「頼んだわよ…ヒコザル…」

と言いながらヒコザルを出すそれに対し相手は

「行け！リザードン…」

と言ひ先ほどのリザードンを出した。

「ヒコザル！ひのこ！」

ヒコザルがひのこを出すがリザードンはびくともしない。
(やつぱりマコトは強いわね…。)

とマオが思つてみると

「まだまだだな…今度はいつから仕掛かれてまつり…リザ

ードン…かえんほうしや…」

と指示をだしそれを聞いたリザードンのかえんほうしやがヒコザルを直撃し、ヒコザルは遠くへ飛ばされ倒されてしまった。

「ヒコザル！戦闘不能…ひつて勝者マコト…」

とソウヤが言つとマオは

「『』苦労様…ゆっくり休んで…。」

と言ひながらヒコザルを抱き起した。

「やつぱりマコトは強いね…。」

とマオが言つとマコトは

「いや…まだまだだな…僕はもつと強くなる…だからマオも強くなれ…それじゃあ後はソウヤとイリスさんか…マサゴタウンのポケモンセンターのバトルフィールドでやりませんか?リザードンも休ませたいのでね…。」

と言つた。するとイリスは

「私は構いません…。」

と答えた。

「それじゃあ…マサゴタウンへ向けて…出発…。」

とマオが言つと四人はマサゴタウンの方向へ歩き出した。

つづく…

第一十話 マコト登場ー（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからもよろしくお願いします。

第一十一話 マコトの実力！（前編）

クロガネジムに挑戦するためクロガネシティへ向けてソウヤ、イリスと共に旅をしているマオはマサゴタウンにいた。

マコトの案内で道に迷うことなくマサゴタウンに着いた四人はポケモンセンターの横にあるバトルフィールドにいた。

「そういえば…施設の改修があつてバトルフィールドがいろいろ選べるみたいだけど…イリスさんは希望がありますか？」

とマコトが聞くとイリスは

「私はなんでもいいです…。」

と答えた。するとマコトは

「そうか…だつたら…水のフィールドにしようか！」

と言つてフィールドの脇にあつたボタンを押した。するとフィールドが開き中からとこうどこう浮島がある水槽が出てきた。

「それじゃあバトルを始めようか…。」

とマコトが言うとイリスがうなずいた。それを見たマオは

「私が審判を務めるわ…。」

と言つて審判用に開いている場所に立つた。

「これよりフタバタウン出身のマコト対カナズミシティ出身のイリスのバトルを開始します！使用ポケモンは一体！どちらかのポケモンが先頭不能となつた時点で終了します！バトル開始！」

とマオが言つとイリスは

「私はこの子で行きます…行つてくださいアブソル！」

と言つてアブソルを出した。

『アブソル わざわいポケモン 進化はなし 空や大地の変化を敏感に感じ災害を察知する能力を持つ。100年生きる長寿のポケモン。タイプはあく』

「ホウエン地方のポケモンですか…だつたらミロカロス！行つてく

れ！」

と言いながらマコトはミロカロスを出した。

『ミロカロス いつくしみポケモン ヒンバスの進化形 大きな湖の底にいるとされている。最も美しいポケモンと言われていて絵画や彫刻のモデルとなっている。タイプはみず』

「アブソル… 10まんボルトです！」

アブソルが10まんボルトを出してそれがミロカロスに迫るがマコトは

「まだまだだな…ミロカロス…ミラー ロート…」

と指示を出す。ミラー ロートによつてはじかれた10まんボルトがアブソルに命中する。

（特殊がダメなら物理で…）

「アブソル… 一気に決ます！ ギガインパクト！」

アブソルがギガインパクトで迫りミロカロスに命中した。

「ミロカロス！」

とマコトが言った。

「立つてくれ…ミロカロス！」

とマコトが言つとミロカロスはゆっくりと体勢を立て直す。

「ミロカロス… あまごいからハイドロポンプ！」

ミロカロスはあまごいで雨を降らせてからハイドロポンプを繰り出した。

「アブソル… よけてください…」

とイリスが指示をするが先ほどのギガインパクトの反動で動けないアブソルをあまごいで威力が上がつているハイドロポンプが直撃しアブソルは倒れてしまった。

「アブソル戦闘不能！ よつて勝者マコト！」

とマオが告げるとイリスはアブソルに駆け寄り

「アブソル… よくやりました…。」

と言つてアブソルをモンスター ボールに戻した。

「なかなかやるわね…。」

「イリスが言つてマコトは

「まだまだな… さつきも言つたが僕はもつと強くなつて見せる… 絶対に…。」

と言つた。それからソウヤの方を向く

「それじゃあソウヤ… 今度は君とバトルだ… フィールドの希望はある?」

と聞いた。

「それじゃあ…」

ソウヤが希望を伝えるとマコトは

「へえーなかなか面白っこいと言つね…。」

と言つてフィールドの脇のボタンを押した。

そんな様子を見ている二つの二人組…

「なかなか強いじゃない… あのマコトとかこうやつのポケモン…。」

とエリが言つとダイキは

「確かに… 強いな…。」

と言つた。するとエリは

「だつたらあいつのポケモンをゲットしてサカキ様に献上するわよ

！」

と言ひながら立ち上がつた。

「それはちょっと難しいんじゃないかと…。」

とマリコが言つとエリは

「いい? バトルが終わつてあいつのポケモンがつかれているとじまに

…。」

とエリが言つがダイキは

「見たところ余裕勝ちしてゐるけど… あのマコトは

と言つた。すると横からマリコは

「そうよね… 強いし上にせいや紳士的な態度、何よりあの容姿はまさに私のタイプね…。」

と言つた。

「マコ「… やうこいつ話をしてゐわけじゃ…。」

とダイキが言つとHリは

「確かにいい男ね…」の前はすぐに飛ばされたからあんまり見てなかつたけど…。」

と言い少し間を開けてから

「でも！作戦は作戦！あいつのポケモンゲットするわよ…。」

と言つた。

「それで… やうやくんだよ?」

とダイキが言つとHリは

「せんなあんたが考へるに決まつてゐじゃなー。」

と言いダイキは

「まつたく… やつぱつこいつなるのか…。」

とつぶやいた。

「それにどうあるとも予算がないからそれをどうつかしないこと…。」

とダイキが言つとHリは

「だつたら… 提案があるんだけど…。」

と言つた。

「珍しいな… Hリが提案なんて… それでどんな内容だ?」

とダイキが聞くとHリは提案の内容を話した。

「確かに言えてるね…。」

とエリの提案を聞いたダイキは言つた。

「わかつたら行動開始よ…」

とHリが言つとダイキは

「それじゃあ行きますか…。」

とつぶやき二人はある場所に向かつて歩き出した。

つづく…

第一十一話 マーテの実力-（前編）（後書き）

読んでいただきありがとうございました

これからもよろしくお願いします。

第一十一話 マコトの実力！（後編）

クロガネジムに挑戦するためソウヤ、イリスと共に旅をしていたマオはマサコタウンにいた。

バトルフィールドが開いてきて中から丈の長い草が生えたフィールドが出てきた。

「さて…ソウヤ…丈の長い草のフィールドをチョイスしたよ…やつそく始めようか…。」

ヒマコトが言うとソウヤは

「やうだな…それじゃあさつそく！」

と叫ぶとマコトはマオの方を向いて

「このフィールドでの特別ルールはここに書いてある通りだ…ちやんと審判しろよ…マオ！」

と言った。

「わかったわよ…。」

と言つとマオはルールが書かれているボードを見て

「確かに面白そうね…。」

とつぶやいてから

「これよりフタバタウン出身のマコト対カナズミティ出身のソウヤのバトルを開始します！使用ポケモンは二体！どちらかのポケモンがすべて戦闘不能となつた時点で終了します！なおトレーナーによるポケモンへの指示並びにポケモンの交代は一切認められませんので注意してください…バトル開始！」

とマオが叫ぶとマコトは

「まずは…カクレオン…行つてくれ！」

と言ひながらカクレオンを出した。

『カクレオン いろへんげポケモン 進化はなし 体の色を周りの景色に合わせて変化させる能力を持つポケモン。驚くと元の色の戻

つてしまつ。タイプはノーマルだが特性であるへんしょくの効果で受けた技のタイプに変化する。』

（カクレオンか…これまた厄介なポケモンだな…だけど…。）

「行け！バシャーモ！」

と言いソウヤはバシャーモを繰り出す。

かくしてトレーナーの指示なしのルールで一体のバトルが始まった。

（それにしても思ったより草の丈が長いな…バシャーモとカクレオンの位置を確認できるのは時々草むらの長さを超えて見える技だけか…。）

と思いつながら上から見ていて状況がよくわかつてゐるであらうマオとイリスを見た。なぜイリスも上にいるかというのは早い話不正防止である。このフィールドではトレーナーからポケモンの様子がまったく言つていいくほど見えないため審判を最低でも一人配置しなければならないのだ。

（これほどまで見えないのはもどかしいな…。）

とソウヤが思つていてマオとイリスが白い旗を振つてそのあとにマオが

「カクレオン！戦闘不能！よつて勝者バシャーモ！」

と告げた。するとソウヤはカクレオンを

「カクレオン…ご苦労様…なかなかやるね…だけ…ここはまだどうかな…行つてくれ！エンペルト！」

と言つながらボールに戻しエンペルトを繰り出した。

『エンペルト こつていポケモン プライドを氣づつけるものは流れ氷もを切斷するつばさで真つ二つにする。タイプはみず・はがねさて…相手がポケモンを出したらふたたび時々見える技などを見るだけである。

（頑張つてくれ…バシャーモ…お前ならやれると信じてる…。）
どれだけの時間がたつただろうか？いや、長く感じているだけかもしれない。その後バシャーモがやられて今はキルリアを出している。

（この人やけに強い… 一切指示を出していないにもかかわらず時々見えるバブルこうせんなどの場所からしてかなりの腕前だ… このルールだからこそ長く続いているが普通に戦つたらイリスのように速攻でやられてるな… いつたい何者なんだ？ それにマナさんと言ひこの人と言ひ… マオやユキもおそらくとんでもない隠れた実力がある気がする… それになんでコハントウンではなくフタバタウンを出身地と名乗つたりしているんだ… いつたいなんなんだ？ コハントウンつて言うのは…。）

とソウヤが考えているとマオとイリスが赤い旗を振つてから「キルリア！ 戦闘不能！ よつて勝者フタバタウンのマコト！」とマオが告げた。

「結構強いんですね…。」

とキルリアをボールに戻したソウヤが言ひとマコトは「君もなかなかだと思うよ… さすがホウエンリーグでベスト8に進出しただけある…。」

と言つた。ソウヤが

「知つてたのか？俺の事…。」

と言ひとマコトは

「忘れたの？ まつホウエンリーグで自分が対戦した相手なんていちいち覚えてないものなのかな…。」

と言つた。

（ホウエンリーグでの試合？ 確か相手は…。）

とソウヤが思考をめぐらすとすぐにある人物が思い当つた。

「思い出した！ 確かホウエンリーグで優勝してたよな！」

と言つた。するとマコトは半ばあきれ気味で

「やつと思ひ出したわけね… 私はあなたに勝つてベスト4に進出したんだけど… 今の今まで忘れてたんだね…。」

と言つた。

「それはともかく… いいバトルだつたよ…。」

と言ひながらマコトが手を差し出すとソウヤはその手を取つて握手

をした。それからマコトはイリスの方へ行き

「イリスさんも…いいバトルだつたよ…。」

と言しながらイリスと握手を交わした。

「マコトはどんどん強くなつていくな…私もがんばらないと…。」

とマオが言つとマコトは

「やういえは残りの三人はどうしたんだ? ユキさんとかヒナコさんとか…。」

と聞いた。マオが

「ユキちゃんはこの前ちょっとしたことがあって引きこもつたりしがて…。」

と言つとマコトは

「またか…相変わらずと言つかなんといふか…一人は…。」

と聞くとマオは残りの二人の今の様子を知つてゐる限り話した。先日会つたヒナコはともかくユウトとは一年以上会つていないので正確な情報ではないが…。

「なるほど…みんなそれぞれ夢を追いかけているのか…。」

と言つとマコトはリュックを持つて

「俺は一旦フタバタウンへ行くよ…ユキさんやヒナコさんにも会いたいし…それじゃあな…コウトにあつたら僕は元気だつて伝えておいて…元気でな…」

と言つてマコトはフタバタウンへ旅立つた。

つづく

第一十一話 マーテの実力!（後編）（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからもよろしくお願いします。

第一二三話 ロケット団 三人の出金

次なる作戦に使う資金を集めるためロケット団のHリ、マリコ、ダイキの三人はマサゴタウンのある商店でアルバイトをしていた。

「それにしても… Hリがこんなこと言ひだすなんて意外だな…。」
とダイキが言ひとマリコは

「まあ… ムサシさん達もやつてたようですが… それにしてもよくできましたね… アルバイト…。」

と言ひとダイキは

「まあ指名手配と言ひてもそんな熱心に手配書見る人なんて少ないからな… 結構探せばアルバイトできるよ… とにかく資金を集めないとね！」

とダイキが言ひと親方が

「…Hリ… 何せぼつとるんだ… しつかり仕事をせんか…。」
と言ひた。

「はい！」

と答えると二人もエリと共に仕事を始める。

「それにしても… こうしてると昔のことを思い出すな…。」

と大きな荷物を抱えながらダイキが言ひとマリコは横で小さめの荷物を持ちながら

「そうですね…。」

と答えた。ダイキは荷物を所定の位置に置くとそこにかけてあつた日めぐりのカレンダーを見て

「もう5年になるのか… 僕たちがロケット団に入団してから…。」
とつぶやいた。

「本当ね… 5年前、エリに出会った時もこんな風に一人で荷物運んでたつ…。」

とマリコが言ひとダイキは

「やうだつたな…。」

と答えるとそれから少し間をおいてダイキは
「今でもはつきり覚えてる…今から5年前…地図上からあの町が消
えた…ちゅうどあの日だつたな…。」

と語つと皿を細めて遠くの空を見つめていた。

5年前…

「やべーぞー」コハントウンのマナセへの荷物まだ届けてねーじゃ
ん…。」

とダイキが語つとマリコは

「とにかく急がないとまた親方に大目玉くらうわよー…。
と言つとダイキと共にコハントウンの方へ走り出した。
「ねえ！コハントウンまでどのくらいかな？」

とマリコが聞くとダイキは

「多分このまつすぐ走れば15分ぐらいで着くと思つー。」
と答えながら走つていると一人の女の子にぶつかった。

「「めん…大丈夫かい？」

とダイキが聞くと女の子のうち栗色の髪をした子が
「助けてくださいー！」

と半泣きで訴えた。

「どこが怪我でもしたの？」

とマリコが聞くともう一人の黒髪女の子が

「町が…私たちの住んでる町が誰かに襲われて…それで…。
と泣きながら語つた。ダイキが

「つて言われてもな…。」

と語つとマリコは

「この子たちが嘘を語つているようでは見えませんよ…といつあえず
様子を見に行ってみません？」

と言つた。

「そうだな…。」

と答えると一人はフタバタウンまで助けを呼びに行くと言つて去つたため栗色の髪の毛をした少女についてその少女が住んでいる町へ行くことになった。

「そこで見たものは今でも忘れないな……。」

とダイキが言つとエリは

「やつね……そういえば……あの子たちの名前なんでしたっけ?」

と言つとダイキは少し考えてから

「ヒイラギマオと……サムゾラコキ……。」

とつぶやいた。するとマリコは

「あつそういうえは……。」

と言ひながらシンオウで何度も自分たちのメカをことじとく破壊している少女に思い当たつた。

「どじかで見たことあると思つたが……やつじつとだつたのか……。」

とダイキが言つとマリコは

「やついえば……あの直後でしたよね……エリが現れたのは……。」

と言つた。

ふたたび5年前……

「どうなつてるんだよ……。」

と言ひながらダイキはコバンタウンの入り口に立ち廻りしていた。かつて小さいながらも人の生活が息づき活氣あふれていた町はそこにはなかつた。

「誰がこんなこと……。」

とマリコが言つと向ひから女性と子供が一人がやつてきて

「それはさつぱつよ……。」

と言つた。

「この町の住人ですか?」

とマリコが聞くとその女性は

「こや……私は単にこのマコトとかこの子に頼まってきたんだ……私が

来たときはすでにこの状態だつたがな…。」

と答えて立ち上がつてから

「私はエリ…あんたたちは?」

と聞いた。二人が

「私はマリ」です…。」

「俺はダイキだ!」

と答えるとエリは

「ここに会つたのも何かの縁かもな…まだどこかで会おうか!」

と言つとエリは去つて行つた。

「それからシンオウにいるのが嫌になつてカントーに出てきて当てもなく半ばやけくそでロケット団に入団して…ロケット団訓練所でエリと再会したんだつけ…。」

とダイキが言うとマリは

「そうでしたね…すつかり忘れてました…今日は5年前のあの日、私たち三人が初めて出会つた日でしたね…。」

と言いダイキは

「そうだな…。」

と答えてからエリと共にふたたび荷物を運び始めた。

その頃マオ達一行は…

「それで…ここはどこなんだ?」

とソウヤが聞くとマオは

「おかしいな…コトブキシティはここだと思つたんだけど…。」

と答えた。皆さんお察しの通り現在マオ達一行はマサゴタウンを出た直後に迷子に…「迷子じやなくて寄り道!」この状態は一般的には迷子と言つただが…ともかくまつたくビニにいるのかわからなくなつてしまつた。

「ちゃんとコトブキシティに着くんですか?」

とイリスが聞くとマオは

「大丈夫よ！絶対つくから！」

と言つとマオはふと手元の腕時計に目を落とす。そこに表示されている日付を見てマオは

「そういえば……ちょうど5年前の今日だつたな……あの日……。」
とつぶやいた。

つづく…

第一十三話 ロケット団 三人の出会いー（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからもよろしくお願いします。

第一十四話 動き出す組織

クロガネジムに挑戦するためソウヤ、イリスと共に旅をしているマオはやつぱり森の中をさまよっていた。

「ところでマオさんはマコトさんの事どう思つてるのでですか？」
とイリスが聞くとマオは
「やうだな…かつこよくて優しくて…ちょっと変なところあるけど…」
…。
と語りとイリスは

「そうですね…ところで変なところどうですか？」

と聞いた。するとマオは

「えつだつて女の子なのに紳士ぶつちやつて変じやない！」
と言つた。するとソウヤとイリスそして上空の気球で丸いアンテナ
を使って会話を盗み聞きしていたロケット団の三人組が
「――マコトつて女の子だったの――」
と大声で言つた。

「ただけど…誰も気づかなかつたの？」

とマオが首をかしげて言つとソウヤが

「だつてあの口調と言い格好と言いボーカルにもほどがあるだ
るー！」

と言つた。するとマオは少し困つた様子で

「私に言わないでよ…。」

と言つた。それからソウヤは少し間をおいてから

「それはいいとして…いつになつたらコトブキシティに着くんだ？」
と聞くとマオは

「おつかしいな…もうすぐのはずなんだけど…多分もうすぐ…のは
ず…迷子になんかならないから…絶対もうすぐだから…」
と必死に訴えた。するとイリスが立ち止まり

「あれって…『トブキシティ』じゃありません?」

と言った。

「『トブキシティ』かどうかわからないけど早く行こうぜー」と言つとソウヤが走り出しイリスがそれに続いた。

「ちょっと…待つてよ!」

と言いながらマオも追いかけ始める。

そんな三人を画面越しに見つめる一人の男がいた。画面には右半分の三人が写っている方にはマオの顔に何やらマークがされており左側にはヒイラギマオという文字とマオの写真が表示されており画面の中央に「一致」と赤い枠で表示されている。

「ようやく見つけたぞ…ヒイラギマオ…。」

と言つとその人物は別のファイルを開く「要警戒人物」というそのファイルにはヒイラギマナ、ヒイラギマオ、サムゾラユキ、ナナヤマヒナコ、ナカシママコトの五人の名前と顔写真が載っていた。するとその男の傍らにある電話が鳴りだした。

「私だ…。」

と言つて電話に出て話の内容を聞いた男は

「私も今電話しようとしていたところだ…とりあえずヒイラギマオには手を出さな…もう少し様子を見た方がいい…監視を怠るな…それとヒイラギマオといふソウヤとイリスとか言う二人を要注意人物としてマークしておけ…。」

と言つと電話を切つた。

「…もうすぐだ…もうすぐ計画は実行される…。」

と言つとドアをノックしてから秘書らしき人物がやつてきた。

「失礼いたします…。」

と秘書が言つと男は

「ヒイラギマオの事ならさつき確認したぞ…。」

と言つた。すると秘書は

「いえ…それが…タチカワユウトが逃げ出しました…。」

と報告した。

「なんだと！ いつたいでうやつて…」

と言つと秘書は

「警備の隙をつかれたようでして…。」

と言つた。

「今すぐ連れ戻せ！ 絶対に探し出すんだ！」

と男が言つと秘書は

「はい！」

と答えて部屋を出た。秘書が去ると男はいらだつた様子で「こんな時期に！ いらぬことを…」

と大声で言つていた。

その頃どこかの地方のどこかにあるうつそうとした森で一人の男の子が草をかき分けながら森の中を走つていた。

（今すぐマオ達に伝えないと！ すぐに逃げるようになつて！）

と思いながら必死に走つてゆくすると後ろから黒い服を着た集団が追いかけてきた。

「まずい！ もう追つてきやがつた！」

と言つと男の子は無我夢中で走る。だが黒い服の男たちにすぐに囲まれてしまつ。すると男たちの後から追つてきた女性が

「結構なことしてくれるじゃない… ユウト君…。」

と言つた。ユウトと呼ばれた男の子が

「今」のユウト君だなんて呼ばれてもいい気はしないよ…。」

と答える。すると女性は

「そう？ でもいつまでいきがつていられるかしら… あなたの背後は川… そして周りには屈強の男たち… さて私たちの足元にも及ばないようなポケモンしか持つてないあなたはどうしたらいいか… 選択肢は一つしかないわ… 一つは… 素直に降伏するか… もう一つはここで最後まで抵抗して死ぬか… どつする？」

と聞いた。するとユウトは

「選択肢が一つ足りないよ……。」

と言つと背後にある流れが急な川の方へかけて行き崖から飛び降りた。

「どうしますか？」

と一人の男が聞くと女性は

「ほおつておきなさい…どうせ助からないわ…ボスにはタチカワコウトは死亡したと伝えておくわ…。」

と言つてその場を後にした。

男たちや女性が去つてからしばらくするとつるのむちが近くの木に絡みつきそれにつかまってコウトが上がってきた。
(まつたく…崖の下を確認せずに行くなんて…結構いい加減だな…でもこれで俺が死んだことになつて幾分か動きやすいか…。)
と思つてから

「つて言つてもあんなこと言つたはいいけど結局怖くなつて木の根につかまつた俺も俺だよな…。」

とつぶやくと月明かりがうつすらとした光を頬りに川に沿つて下流の方へ歩き出した。

つづく…

第一十四話 動き出す組織（後編）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第一一十五話 ポケモンなりきり大会！（前編）

クロガネジムに挑戦するためソウヤ、イリスと共に旅をしていたマオは偶然たどりついた町で開催されているポケモンなりきり大会の会場にいた。

「俺はもつと早くジム戦が…。」

とソウヤが言うとイリスは

「いいじゃないですかソウヤ…せつかくこいつの場面に遭遇したのですから…。」

と言いマオが

「そろそろ…楽しまなきや！」

と言つと

「皆様。ポケモンなりきり大会ではまだ飛び入り参加の方を募集しています。参加したい方は受付までお越しください…。」

と放送が流れる。マオが

「よーし！せつかくだから参加しよう！」

と言つとイリスも

「だつたら私も…。」

と言つて席を立つ。

「ちょっと待てよ！二人とも…。」

とソウヤが言うが二人はすでにそこにはいない。

「まったく…。」

とつぶやくとソウヤも受付がある方へと向かつた。

その頃会場の外ではテレビの映像でなりきり大会の飛び入り参加者歓迎との内容を見たエリが

「私も参加するわ！一回出てみたかったのよね…こいつの大会…。」
と言つとマリ「が

「だつたら私も…」

と言つてエリと共に会場の方へと走り出す。

「ちゅつと…指名手配中だつて忘れたの…」

と言つダイキの意見は完全に無視されたのだった。

また別の場所でもある女性が

「ポケモンなりきり大会か…参加してみよつかな…。」

と言つと会場に向かつた。

先ほどのアナウンスから30分ほどたつと司会者の女性が出てきて
「さて！ポケモンなりきり大会がいよいよ開催されます！司会はコ
ウカさんが取材でトバリシティへ行つてるのでわたくしリンが司
会を務めさせていただきます…それではエントリーナンバー1番か
らどうぞ…」

と言つと舞台上少年が上がつてきてポケモンを出す。

その頃廊下ではマオとイリスがそれぞれ自分のポケモンを見つめていた。

「さて…どうしようか…。」

とマオが言つとイリスは

「困りましたね…。」

と言つすると後からソウヤが現れて

「なんだよ…何も考えずに参加したのか…。」

と半ばあきれ気味に言つするとマオは

「そうだ…いいこと思いついた…！」

と言つとどうかへ行つてしまつた。

「ちゅつとマオさん…」

トイリスが言つとマオは何かを準備するために行つてしまつた。

「困つたわ…どうしたらいいと思つ…ソウヤ…。」

トイリスが聞くとソウヤは

「俺に聞かれてもな…。」

と答える。すると後ろから

「だったら私がお手伝いしましょうか?」

と言しながら一人の女性が来た。

「あなたは?」

とソウヤが聞くとその女性は

「私はナオコって言うんだけど…案があるのに飛び入り参加の受付間に合わなくて…。」

と言った。

「そうなんですか…私はイリスです…。」

とイリスが自己紹介するとそれに続きソウヤが

「俺はソウヤです…。」

と自己紹介する。

「イリスさんにソウヤ君ね…そういうえば私少し人を探してるんだけど…この子見たことある?」

と言いながらナオコが出した写真には自分たちと同じ年ぐらいである男の子が写っていた。

「知りませんけど…。」

とイリスが答えるとナオコは

「そう…すっかりこっちに来てるかと思つたけど…。」

とつぶやくと紙を取り出しなにかを書いた後

「これ私の家の電話番号なんだけど…この子見かけたら電話してくれるかしら?写真も渡すから…でも探すときは一人だけでね…決してほかの人のこの写真見せたりしちゃダメよ…。」

と言った。イリスが

「何ですか?」

と聞くとナオコは

「探す人が多いと連絡がたくさん来たら大変だからよ…ほら、この子ってどこにでもいそうな顔立ちじゃない…。」

と言つて写真を指差した。

「確かに……。」

とソウヤが答えるとナオコは
「そーでしょー。」

と言つてからイリスの方を向いて

「そうだった！なりきり大会の案だつたわね！たとえば……アブソル
とか持つてる？」

と聞いた。イリスが

「持つてますけど……。」

と言いながらアブソルを出すとナオコは

「さあて一見こうこうよくな場面では不利に見えるアブソルをどう
するか……選択肢は二つ……一つはオドシンなどと言つたシンオウでも
ポピュラーなポケモンのなりきり……そしてもう一つは……」

と言つと二人に自分の考えを説明した。それを聞くとイリスは
「なかなか面白そうですね……。」

と言つた。ナオコが

「そーでしょ！早速やりましょー！」

と言つとイリスは

「でも……選択肢が一つ足りませんよ……私はアブソルではなくリオル
で行きます……。」

と言つと

「ソウヤ……行くわよ……それではナオコさん……まだどこかで……。」

と言い残しイリスはソウヤと共にその場を去つた。一人が去つてい
くとナオコは

「選択肢が一つ足りないね……あの子と一緒にね……。」

と言いながら一人の男の子を思い浮かべていた。

（それにも……あんなところに落ちたら助かるはずもないのに探
してこいだなんて……あの人は慎重すぎるわよね……。）
と考えながらナオコはどこかへと歩いて行つた。

その頃また別の場所ではエリとマリ「そして結局参加することに

したダイキが作戦を立てていた。

「さて…どうしようかな…。」

とダイキが言うとエリは

「結局定員の関係で参加できたのはエリだけですから…エリのポケモンで言つたらどう?」

とマリコが言つとエリは

「ここと考えたー!ダイキ…ポケモン貸しなさいー。」

と言つとダイキは

「ここけど…どうするんだ?」

と言つながらモンスター・ボールをエリに渡す。

「いいからー!いいからー!」

と言つとエリはどこかへ行つてしまつた。

つづく
…

第一十五話 ポケモンなりきり大会！（前編）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第一二十六話 ポケモンなりきり大会！（中編）

クロガネジムに挑戦するためソウヤ、イリスと共に旅をしていたマオは途中ある町で開催されているポケモンなりきり大会に参加していた。

「さて…盛り上がってまいりましたポケモンなりきり大会…ここからは飛び入り参加の方です！まずはシンオウ地方のフタバタウンから来たマオさん！どうぞ！」

とリンが言うとステージにマオと体をピンク色に染め段ボールで作つた尻尾を付けてエネコになりきつたヒコザルが上がつてきた。

「これは…いいですけど…。」

とリンが言葉を詰まらせるとマオは

「どうかしたんですか？」

と聞いた。するとリンは

「あのー燃えてますよ…ヒコザルのお尻の炎で尻尾が…。」

と言つた。マオがヒコザルの方を向くと確かに段ボールで作つた尻尾が燃えていた。

「あちゃー失敗か…。」

とマオが言うとリンが

「それどころじゃないでしょ！早く消さないと！」

と言つと近くにあつたバケツの水をかけて消火した。

「あつーヒコザル！」

とマオが言うとリンは

「…とにかく…衣装がなくなつたため…マオさんは失格！」

と言つた。マオがステージから降りるとリンは

「次の参加者は…カナズミシティから来たイリスさん…それではどうぞ！」

と言つと今度はイリスと段ボールや枝などを使ってウソハチになり

きつたリオルがステージの上に上がった。

「これは素晴らしいですね！」

と審査員の一人が言うとイリスは

（よしつー！）

と思つていたがその時壁が突然壊れて大きなメカが登場して商品が入った箱を奪い取る。

「会場に何者かが侵入しました！ 何者なんでしょうか！」

とリンが言うとメカの頭部から三人組が現れ

「いつたい何者なんでしょうか！」と言われても答えないのが常識だが… まあ今回ぐらには答えてやろう！

とダイキが言うとステージのそばにいたマオが

「とかなんとか言って結局いつも答えてるじゃない…。」

と言つた。するとエリは

「つるさいわね！ 水を差さないで！ 仕切り直しよ！」

と言いダイキが

「わかったよ…。」

と言つてから

「仕切り直しよ！」と言われても仕切りなおさないのが常識だが… まあ今回ぐらいは…

と言いだすがマリ「が

「変なアドリブはちょっと…。」

と文句を言つた。するとダイキは

「それもそうだな… それじゃあ改めて… 変なアドリブはちょっと…

と言われても答えないのが常識だが… まあ今回ぐらには答えてやろう！」

「光よ！」

「水よ！」

「ポケモンよ！」

「天をも震わせるミュージック」

「海に帰りし美しきビーナス」

「神か閻魔かその名を呼べば
「誰もが立ち止まる重い響き」

「Hリー！」

「マリ」「！」

「ダイキ！」

「今回も主役は私達！」

「我ら天下無双の」

「「「ロケット団」」」

とようやく名乗りを終えた三人組に対しマオは
「またあなた達なの！」

と言った。すると横にいたイリスが
「そのまたあなた達なの！って言つのもだんだんお決まりになつて
る気が…。」

と言つた。マオが

「そりかな…でも前回はイリスが言つたじゃない…それにそんなに
言つてないし！今回で2回目よ…これは…。」

と答えるとHリーが

「でもそんなこと言つてあなたの反応が…なんていつてたら一生終
わらないじゃない…とにかくあんたたちのポケモンもついでにいた
だくわよ…」

と言つと網のようなものでポケモンたちを捕獲していくと思われた
が…

「ピジョット…つばれでつづつでの網を切るんだ！」

と言つ声と共にピジョットが合わられて網を切つてエリたちが捕ま
えたポケモンを別の網で捕獲して横取りした。

『ピジョット とりポケモン ピジョンの進化形 美しい羽を広げ
て相手を威嚇する。マッハ2で空をツび回る。タイプはノーマル・

ひこう』

「誰よ！あんた！」

とHリーが言つとその人物は

「誰よ！あんた！と言われたら答えるのがこの世の理」と言つともう一人誰かが出てきて

「桜よ！」

「海よ！」

「紅葉よ！」

「世界に届けよこの音楽」

「母なる海の守り神」

「女神か魔女かその名を呼べば」

「誰もが振り返る美しき響き」

「ハルミー！」

「ナツミー！」

「アキナ！」

「実際主役は私達！」

「そんな私たちは」

「「「ロケット団」」」

と名乗つた。

「ロケット団つてまだいたの…。」

とマオが言つとエリが

「ハルミー、ナツミー、アキミー何の用よー！」

と言つた。するとアキナは

「アキミーじゃなくてアキナよー！」

と言つた。

「つて言つた春、夏、秋と来て冬がないじゃなー…。」

トイリスが言つとナツミが

「ふん！そのうち見つけるやー。」

と言つた。

「とにかく私たちはそこのベッポコ三人組とは格が違うのやー。それじゃあ帰るー。」

と言つと三人組の氣球はどこかへ飛んでいく。

「待ちなさいよー。」

とマオが言つとダイキは

「待ちなさいって言われて待たないのがロケット団…それじゃあ俺たちもこの辺で…。」

と言つとエリが

「何言つてるのよ！横取りされた分を…」

と言いだすがダイキが

「それが…あのマコトとかいうやつのポケモンを捕まえるために稼いだ分もこのメカにつぎ込んだから予算が…。」

と意見を述べた。

「うつそ！残しどきなさいって…。」

とマリコが言つとダイキは

「ごめんごめん…。」

と言つ

「「」めんでは済まない気が…。」

と会話を聞いていたイリスが言つとマオが

「とりあえず…ヒコザル！ひのこ…。」

と指示をだしヒコザルが放つたひのこの炎が燃料に引火して結局工

リ、マリコ、ダイキの三人組が乗つたメカは爆発した。

「「「やな感じーーー！」」

と言いながら三人は飛んでいきキラーンと星になつた。

つづく…

第一十六話 ポケモンなりきり大会！（中編）（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからもよろしくお願いします。

第一一十七話 ポケモンなりきり大会！（後編）

クロガネジムに挑戦するためソウヤ、イリスと共に旅をしていたマオは途中ポケモンなりきり大会に参加していたがロケット団にポケモンを奪われてしまった。

「待ちなさい！」

とマオが言うが気球はどんどん高度を上げて上昇していく。

「これは大会の途中にポケモン強盗です！大会の行方はいかに！」
この状況下で職業柄からかリポーターしながら走るリンはリポーターの鏡である…多分。

「これでボスに認めてもらえるわよ…」

とナツミが言うとハルミが

「それよりさ…アキミ…。」

と話しかけるとアキナは

「アキナだつてば…わざとやつてない？とこりで何？」

と聞くとハルミは

「そういえば…この気球つて強度大丈夫か？」

と聞いた。

「それはどういう？」

と言いながら上を見ると突然近づいてきたムクホークに気球に穴をあけられていた。

『ムクホーク もつkinポケモン ムクバードの進化形 自分の体が傷つこうとも攻撃をやめなくなつた。とさかの形を気にしている。タイプはノーマル・ひこう』

「まあ…所詮は気球だし…。」

とアキナ言うとそのムクホークは下のポケモンたちが入った網もちぎつてしまつた。

「リオル！」

と言いながらイリスがリオルを受け止めるほかのトレーナーを大体同じだ。

「こうなつたら力づくで！行きなさい！…ドガース！」

『ドガース どくガスボケモン マタドガスの進化前 体内にいろいろなどくがすがたまつてているためまれに大爆発を起こすことがある。 タイプはどく』

ナツミがドガースを出すとハルミとアキナは

「頼みます！ゴルバット！」

『ゴルバット こうもりポケモン ズバットの進化形 かみついたら最後死ぬほど血をすいとるため重くなつて自分で飛行できなくなれる。 タイプはどく・ひこう』

「行つてちょうどい… ベトベター！」

『ベトベター ヘドロポケモン ベトベトンの進化前 月からエッグクス線を浴びたヘドロがベトベターに変化した。 汚いものが大好物。 タイプはどく』

ベトベターはボールから出るなり臨戦態勢に入るがゴルバットは180度旋回してハルミにかみついた。

「離れなさいよ！敵はあつちよーあつちーゴルバット… エアカッター！」

とハルミが指示を出すとゴルバットはハルミから離れてエアカッターオーを出した。

「ヒコザル！ひのこ！」

「キルリア、サイコキネシス！バシャーモはかえんほうしゃだ！」

「ドガース！たいあたり！」

「ベトベター… ヘドロこうげき！」

と四人がそれぞれのポケモンに指示を出す。 それにわざがぶつかり合い爆発した。 煙が晴れると立っていたのはゴルバットとバシャーモ、キルリアの三体のみで残りのポケモンたちは倒れていた。

「これで決める…バシャーモ… かえんほうしゃ！」

「これでどじめよ！ゴルバットもう一度エアカッター！」

二体のポケモンの技はぶつかり合いそしてゴルバットを口ケツト団の方へ飛ばした。ゴルバットがぶつかつた衝撃か知らないが口ケツト団の気球は爆発し三人は飛ばされた。

と言いながら三人は飛ばされていきキラーンとお星さまになつた。

事のおさまりを見届けたムクホークは元来た方へと帰つて行く。

「なんだ、なんだ、どう? あの、ムケホリケ...」
ニマオが言うニイリヌは

「いいじゃ ないですか！ 大会に 戻りましょ う！」

と言つた。すると大会の審査委員長が

「その必要はありません…この大会の優勝者は決まりました…。」

と言つと審査委員長は

「今大会でのトラブルにおいてそのさなかでも物まねを続けたりオ

ルのトレーナーであるイリスさんが優勝です！皆さん文句はありません

「せんねえ」周りの參呂舎は一切文句を嘯つはぬ。それを諒忍する

審査委員長は

「だったら決まりです！それでは今大会の賞品であるポケモンの卵

を差し上げます！大事に育ててください！」

「はい！」

とイリスが返事をすると審査委員長は

「いい返事だ！」

と答えた。すると自然に周りから拍手が聞こえてきてマオが「イリス！ うわううう！」

ル・ル・ル・ル・ル

「俺からもおめでとう。」

と言つた。

そんな様子を近くの草むらから見守る一つの人影
「まったく…マオったら…それにしても見つけたはいいけど…これ
だけの人が味方とは限らなし敵がないとも限らないからマオが一
人の時に話をするか…。」

と言つと少年はムクホークをモンスター・ボールに戻しあげて行つた。

その頃飛ばされていつたいつもの三人組は

「くそつ！あの四季トリオめ！」

とエリが言つとマリコが

「でも…今まで気にしなかつたけど…冬が確かにありませんね…。」

と言つとダイキが

「あの三人友達少ないから…。」

と言つた。すると上から

「友達少ないってあんたらもでしょ！」

と声が聞こえてきた。三人が上を見るといつの中に四季トリオが
木に引っ掛けかっていた。

「お前らも飛ばされたのか？」

とダイキが聞くとナツミが

「そうよ…」

と答える。

「ざまあみなさい…」

とエリが言つとマリコが

「私たちはそれを言える立場じゃないかと…。」

と言つた。

大会の会場の前の道を夕日が赤く照らしている。

「この卵から何が孵るか楽しみですねー。」

とイリスが言つとマオは

「早く生まれるといいね！」

と答える。

「さあ！ 今度こそ「トブキシティ」へ行こうぞ！」

とソウヤが叫び、マオは

「おー！」

と言つて二人と共に歩き出した。

ポケモンの卵をもらつたイリス。三人の旅はまだまだつづく…

第一二十七話 ポケモンなりきり大会！（後編）（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからもよろしくお願いします。

第一一十八話 ノウトの話と動き出す陰謀

クロガネジムに挑戦するためにソウヤ、イリスと共に旅をしていたマオは「トプキシティ」にいた。

「着いたねー」トプキシティー、「

とマオが言うとソウヤが

「お前が方向音痴じゃなかつたらもつと早く着いたと感ひ…。」

と言つた。

「私は方向音痴じやないわよー。」

とマオが言つとソウヤは

（「いつに自覚がない奴が一番厄介なんだよな…。）

と考えながらため息をついた。

「とにかく私はテレビ局の見学に行つたと感ひののですが…マオさん

とソウヤはまじりますか？」

とイリスが聞いた。

「俺も行くぜー！」

「私はちょっと他に行きたいところがあるから…。」

と一人がそれぞれ答えるとイリスは

「そうですか…私とソウヤはテレビ局に行きますのでポケモンセンターで会いましょう…。」

と言つとマオは

「わかつた…それじやあまたあとでー。」

と言つとマオはソウヤ、イリスが去つて行ったのを見てから路地裏に入り

「やこでこそこ見てないで出てきたら?」

と言つた。すると男の子が出てきて

「わかつてたの?」

と聞いた。するとマオは

「ええ… ポケモンなりきり大会のムクホーク… あれあなたのでしょう? それ以降ずっと何者かがついてきた… 私に話しかけないってことは私が一人になるタイミングを狙っていたってこと… そんなんでしょう? ユウト…。」

と言った。

「相変わらずのようだね… マオ…。」

とユウトが言うとマオは

「それで… 人里を忍んで何の用かしら?」

と聞いた。

「それより前にほかの三人はどうしてる?」

と聞いた。おそらくユキ、マコト、ヒナ「の事であろう。

「三人ともフタバタウンの近くで会つたわ… そうそう… マコトがあなたにあつたら僕は元気だ! って伝え置いてつて言つてたから伝えるわね… みんな相変わらずよ… ユキはちょっとしたことがあつて引きこもつてるけど…。」

とマオが言うとユウトは

「そうか… それじゃあ本題に入つていいかな?」

と聞いた。マオがうなずくと

「俺がこの1年何をしてたかってことなんだが… それを長々と話しているような時間はない… 簡単に言うと5年前あの事件を起こした組織が動き出している… 俺はそいつらに捕まつていたんだ… とにかく! 先生には気を付ける!」

と言つた。するとマオは驚きを隠しきれない様子で

「先生つて… あの日に死んだんじや?」

と言つた。

「先生も仲間だつたんだよ… あいつらの… 先生だけじゃない… コハントウンのたくさんの人人が表向きには死んだと思われている行方不明者が実際生きたりしてるんだ… これがどういうことかわかるか?」

とユウトが言った。確かに5年前の事件では死者よりも行方不明者が多く消えた住民の話でシンオウ地方の報道各社を盛り上がらせた。

「つまり……『ハンタウン』を襲った組織と『ハンタウン』の住民が結託していた……。」

「やうじつことだ……おそらく行方不明者の大半が奴らの仲間だと思つ……。」

と告げた。

「でも……それじゃあ……。」

とマオが言つとコウトが

「お前の父親やタツヤ兄ちゃんが奴らの仲間だつて可能性もあるんだ……マナさんも味方とは限らない……。」

と言つとマオは

「そんな……。」

と漏らした。

「俺は捕まつていたところから逃げてきたんだ……もしかしたらすぐに見つかるかもしれない……それに捕まつたら何をされるかわからない……だから、こいつをお前にあずかってほしいと思って……。」

と言つとコウトはマオに自分が腰につけていたモンスター・ボールを差し出した。

「これって……！」

とマオが言つとコウトは

「ムクホークが入つてゐ……こいつはおれが旅に出る前からの仲間だしまオにもなついてたしな……こいつのこと頼む！」

と言つとコウトはマオにムクホークの入つたモンスター・ボールを渡して走り出した。

「ちょっと……コウト！」

と言つたがコウトは振り向かずにどこかに行つてしまつた。

「コウト……。」

と悲しげな表情をしながらマオはつぶやいた。

その頃コトブキシティのテレビ局では

「すごいですね…テレビ局…。」

とイリスが言うとソウヤが

「確かに思っていたよりも大きいな…。」

と答える。それからイリスは周りを少し見てから

「あれって…確か…。」

と言いながら一人の女性を指した。するとソウヤが

「ナオコさんだよな…。」

と言つた。

「ナオコさん！」

とイリスが話しかけるがナオコは気づかなかつたのかそのまま行つてしまつた。

「行つちやつた…。」

とイリスがつぶやき自動ドアから外に出ようと突然シャッターが閉まり外に出れなくなつてしまつた。

「どうなつてるんだ！」

とソウヤが言うと入口のホールに置いてあつたテレビに突然一人の男性が映つた。

「我々は眞の解放を目指す組織カイシン団！このテレビ局は我々が制圧した！繰り返す！このテレビ局は我々が制圧した！これより我々はシンオウ制圧作戦を決行する！これより通常のテレビ放送は中止し我々のシンオウ各地の者どものへ指示および宣伝に使う！現在われらの部隊がシンオウ各地へ向かつてゐる！住民どもはおとなしく我々の部隊の指示に従つてもらつ！」

と男性が言つと放送は終了し、テレビ画面には何も映らなくなつた。

この時刻を境に突然シンオウ各地の通信回線が固定回線、衛星回線共に遮断されシンオウ地方から外部への通信が完全に遮断されてしまつた。さらに、シンオウ地方は突然各地のレーダーから消え失せてしまい他の地方からからシンオウ地方へ向かうこともシンオウ地方から他の地方へ行くこともできなくなつてしまつた。

そう…現時刻をもつてシンオウ地方はこの広い世界から孤立した
のだ。

第一十八話 ハウトの話と動き出す陰謀（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからもよろしくお願いします。

第一十九話 シンオウ孤立！それぞれの…

クロガネジムに挑戦するためソウヤ、イリスと共に旅をしていたマオだがシンオウ地方が突然カイシン団を名乗る組織によつて孤立してしまった。

コトブキシティの街頭に設置されたテレビで放送を見たマオは急いでソウヤとイリスがいるであろうテレビ局に向かつた。
(ソウヤ、イリス無事でいて！)

と思いながらマオは今にも雨が降り出しそうな雲が広がつていたにも関わらずに雲一つない空に気づくことなくテレビ局があると思い込んでいる方向へ走つて行つた。

「ここはジョウト地方のとある町。一人の少女がポケモンセンターの入るとなんだかいつもと様子が違つていた。

「どうかしたんですか？」

と少女が聞くとジョーリイが

「大変なのよ！つい20分ぐらい前からシンオウ地方と連絡が取れなくなつたの！それだけじゃなくてレーダーからも消えつちやつて…今なんとかシンオウ地方と連絡を取ろうとしてるんだけど…。」

と言つた。

「そんな！シンオウ地方へはいけないんですか？」

と少女が聞くとジョーリイは

「はい…レーダーからの観測はともかくシンオウ地方周辺での気象状況があまりにも悪くてとても近づけないのよ…。」

と答えた。その話を聞いた後少女は近くの公園のベンチに座つて「どうしよう…。」

とつぶやいた。すると

「そういう時こそ大丈夫！じゃねえのか？ヒカリ！」

と声がした。ヒカリと呼ばれた少女が顔をあげるとヒカリの幼なじみであるケンゴが立っていた。

「ケンゴ！」

とヒカリが言うとケンゴは

「久しぶりだな！」

と言つた。するとヒカリは

「そうよね……みんな大丈夫だよね……。」

と言いながらシンオウにいるであろう自分の母親や友人たちを思い浮かべていた。

イッショ地方で作戦を進行中のロケット団員の三人組（正確に言うと「人と一匹」）にも知らせは届いた。

「シンオウ地方が孤立か……。」

とムサシが言うとロジロウは

「そういえばあいつら確かシンオウに行つてたな……。」

と言いながら自分がイッショの任務に向かう際に自分たちが愛用した気球を託した三人組を思い浮かべている。

「とりあえず任務に集中するのにや。」

とニヤースが言うとムサシは

「そうね……。」

と答えて三人は次なる作戦の準備に向かつた。

ふたたびシンオウ地方コトブキシティ…

マオが走つているとコウトらしき人影を見つけ

「コウトー！」

と言つた。するとコウトは振り返り

「マオ……。」

と言つた。マオが

「コウト……これをやつてるのもコウトが言つてた……。」

と言つとコウトは

「……わからない……でももし奴らだとしたら誰が敵で誰が味方か……。」

と言った。するとマオは

「だったら……この人なら絶対大丈夫って人だけ集めてみよう。」

と提案した。

「それも……そうだな……。」

とコウトが言うとマオは

「それじゃあ……もっそく行こうか……。」

と言つてからコウトとともに歩き出した。

「まずはどこに行くんだ?」

とコウトが聞くとマオは

「とりあえずコウトに会つ前にテレビ局に行くつて言つてたソウヤ
とイリスを探さないと……とりあえずテレビ局へ……。」

と言つとコウトは

「テレビ局は反対側だし……それにやめておいた方がいいと思つよ……
今のテレビ局は奴らの拠点になつてているし奴らだとしたらコハンタ
ウンの生き残りの中で自分らの味方でない人を探すはずだから自ら
捕まりに行くようなものだよ……それよりほかにいないの?」

と聞いた。

「それじゃあ……ヒナコ達は?たぶんまだシンオウにいると思うけど

……。」

とマオが言つとコウトは

「そうだな……一旦フタバタウンへ向かおうか……。」

と言つとコウトはフタバタウンの方へ歩き出しまオはそれに続いた。
(ソウヤ……イリス……ごめん……絶対助けるから……。)

と思いながらマオは歩いていた。

一人がコトブキシティを立つた直後コトブキシティはカイシン団
の手に落ちた。マオ達を追つていたこの三人組もシンオウ地方の異
常を感じていた。

「いったいどうなつての?本部に連絡が取れないわよ!」

とエリが言つとダイキは自分で作った特殊な電波を使つ通信機を取り出して

「これならなんとかると思うけど…。」

と言つながら動かしたがまったく動作しない。

「これが動かないことはシンオウ地方のあととあらゆる電波はカットされたつことだ…。」

と言つた。マリゴが

「どうしたことですか？」

と聞くとダイキは

「この通信機は一般的の衛星通信じゃなくてロケット団が打ち上げた特殊衛星を経由してゐるんだ…それが切れるつてことはこれをやつているのはただ事じやないね…。」

と言つた。

「それにしても…どうあるのよ…本部とも連絡取れないし…。」

とエリが言つとダイキは

「それは電波が回復するのを待つしかないけど…。」

と言つながら空を見上げる

「どうしたんだ？」

と言つながら空を見上げると

「これは…。」

とつぶやいた。するとマリゴが

「こつたいどうなつてゐんでしょうか…。」

と空を見上げながら言つた。するとナツミがやつてきて

「あら…作戦を展開する土地の事を詳しく知らないなんてね…。」

と言つた。

「あんたにはわかるわけ? だつたら教えなさいよ…。」

とエリが言つとハルミは

「ものを頼む態度ではないのでは?」

と言つながら現れた。それから少し間を開けてから

「教えてください!」

とエリが頼むとナツミは

「今回の事を引き起こしているのはカイシン団と言つ組織。彼らは真の解放を目指すと言つていた。私たちもその意味がよくわからなかつたけど……この空を見てはつきりしたわ……私の推測の域を脱しないけど……おそらく奴らの目的は……」

と言つた。エリが

「目的は？」

と聞くとナツミはカイシン団が目的としているであろうことを三人に告げた。

つづく…

第一十九話 シンオウ孤立…それぞれの…（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1484x/>

遙かなる旅

2011年11月21日16時44分発行